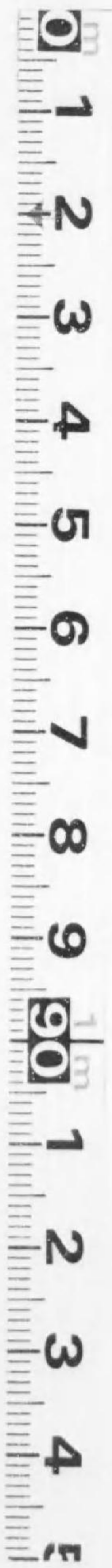


517

234



始



外8区47

文壇は動

藤森淳三著



1923

虎山堂出版

577-234



文壇
動く

藤森淳三著



大正
12.5.10
内交

目次

| | |
|-------------------------|----|
| 穂氏と吉二君..... | 三 |
| 映畫「カラマゾフ兄弟」..... | 一〇 |
| 女、酒、花、自動車..... | 一五 |
| 先づ藝術に就いて考へよ..... | 一九 |
| トルストイの家出と有島武郎の財産拋棄..... | 二六 |
| 和解の論争..... | 三六 |
| 「幸福の國へ」の作者..... | 四九 |
| 谷津温泉にて..... | 五九 |
| 芥川龍之介稱讃..... | 七〇 |

講談の面白味……………九七

齒がゆくなつて……………一〇〇

愚痴が小説になつた「剪られた花」……………一〇三

藝術家に就いて……………一三三

暮れ三日間……………一三四

○里見雅とその讀者……………一三〇

○快傑菊池寛……………一三五

宇野浩二と私……………一四〇

相手になつてやる……………一六九

もつと裸かになれ……………一六二

佐藤春夫君を慨く……………一七一

再び春夫君に……………一七五

私が女に生れたら……………一六八

「十字軍」を読んで懐ふ……………一八〇

文壇は動く……………一八七

藝術家と結婚……………二二三

文壇は動く

装幀

萬鐵五郎

淳氏と吉二君

時事の六號で見ると、最近里見氏は中戸川君に絶交状を送り、中戸川君もそれと同じく絶交状を以て答へたといふことだ。(が、二日経つて里見氏の取消文が出たが、それは絶交状が送られたものではなく、聞けば中戸川君から出したのだと云ふ。が、兎に角この稿はその取消文以前に書かれたものなので、どうかそのつもりで読んで貰ひたい)事の真相を知らない私は、里見氏がどういふ譯で中戸川君に絶交状を送つたのか、無論何も分らない。だが、何しろこの消息は鳥渡私の興味を引いた、といふよりは、何んだか果してといふ感じがしたのだつた。

里見氏とは碌々言葉も交したことのない私、中戸川君とも二三度の面識しかない私——その私のことだから、これ迄の里見氏對中戸川君の間が如何なるものだつたのか

それは殆ど知らない。が、常々私はこの二人の關係がどうも世間で傳へるやうなものではあるまいと思つてゐた。師弟關係か友人關係か、それは何れにしろ二人の間にはどうにもならぬ隙があると思つてゐた。といふのは、この二人の人間の差が餘りにひど過ぎるからだ。里見氏はすつかり大人（いゝ意味の）であり、相手の中戸川君は餘りにも子供過ぎるからだ。従つて私は、まあ精々里見氏の心持では大人が子供を庇ふやうに、中戸川君を庇ひ育てるといつた風な態度を採つてゐられるのだらうと、さういふ關係の二人と見てゐた。

元來里見氏は、簡単に云へば中戸川君の所謂人間修養論者だ。人間が偉くなり確かりせねば藝術も駄目だ、といふ考への人だ。それには修養が要る、修養して人間が出来上らなければいけない、さういふ考へを持つてゐる人だ。私は讀まなかつたが、讀まないで云ふのはいけないが、改造に出た「朱き机に凭りて」にしろ、又「年少の友に」といふ感想にしろ、すべてさういつた同氏の心掛けを書いたものだといふことであつた。一心籠めて射た矢は岩にも立つ——さういふことも書かれてあつたさうだ。

里見氏のこれらの感想に對しては、氣障だとか慢心してるとか、或ひは又「下らない」とか色々よく云はない人が多かつたやうだ。が、果して下らないだらうか！いや私は一概にさうは思はない。人間修養論者なる同氏の言葉として如何にも尤もだと思ふ。と云つて私は今その尤もな所以を説く暇はない。實際又、こんなことは理屈で云つても分らないのだ。感じる者だけが感じるのだ。「一心籠めて射た矢は岩にも立つ」といふ文句だけなら小學校の生徒だつて知つてゐる筈だ。が、里見氏と小學校の生徒との相違は、實際にその言葉を感じてゐる、ゐないの點にあるのだ。そして、それを本當に感じる者にこそ、その言葉は有意義なのだ。即ち其處に信念が生じて來、その信念からこそ立派な藝術が生れて來るのだ。「一心籠めて射た矢が岩に立つたためしがあるか知ら」などとひやかす人があるかも知れない。が、そんな人は無論門外漢だ。

氣障でもなければ、慢心でもない。本當に眞剣で敬虔なのだ。私は里見氏の小説には感心するものしないもの種々あるが、兎に角かういつた同氏の心持、心掛け、生き方

には敬意を以て見ることが出来る。眞剣で云つてゐるのを氣障と見られ、慢心と蔑まれる。世の中といふものは實際むづかしい。では、一體吾々は何を語ればいゝのか！いや、吾々は人の思惑を慮る必要は無いのだ。

ところで中戸川君、君はこの里見氏の心持を心から感じる事が出来ますか？ いや君にはそれが感じられないのだ。いつか君が雑誌人間に書いた感想、あれはその正直に思つたまゝを書いてあるといふ點で面白いには面白かつたが、その内容はと云へば明かに君の淺薄さを暴露したものだつた。君はあの文章で、里見氏の考へと君の意見とが正反對であると述べてゐた。藝術家は修養でなくて天分だ——一言で云ふと、君はさういふ考へらしかつた。そして「僕は里見氏の人間修養論にはいつも反對し、議論する、さうして結局僕には里見の考へが分らぬ。」——さういふ意味のことも書いてあつた。

中戸川君、私はあれを読んで君を輕蔑した。小説で感心してゐない以上に、あの文章は君自身を私に輕蔑せしめた。いや輕蔑しただけではなかつた。失敬だが私は君を

憐んだ。世間の苦勞をまるで知らなさうな君、そして少年にして高料に登つた君、その君に「修養」が分らぬのも無理でない、と莫迦に大人みたいな口を利くやうだが、私はさう思つたのだ。それに第一あの文章を見た里見氏がどんな顔をしただらう、とも思つた。微笑とかを洩らしたか、それとも大きく「ハツハツハ」と笑つたか！しかし顔はどうであらうと、心では随分いろんな意味でへんだつたに違ひない、と想像したのであつた。

中戸川君、生意氣云ふな、と怒つてはいけない。私は遠慮なく云はう——私には君が生嚙りの中學生に見える。その生嚙りの中學生は大人に議論を吹ツかけて、どんなに云つて聞かせられても生嚙りを振廻してゐる。自分一人で得意になつてゐる。里見氏が閉口したのも無理はなかつた。今度里見氏が君に絶交状を送つたのには、無論他に事情があるかとも思ふ。かねて里見氏がこの中學生を持つて餘してゐて、幾らかはそれが今度のことにも關係があるのではあるまいか、と私は考へる。

中戸川君、君の小説は中々巧い。誰かも云つてゐたやうに、その描く腕に至つては

常に私も敬服してゐる。が、しかし肝腎の君といふ人間はどうしても生嚙りな中學生といふところだ。どの小説を見てもそんな感じがする。君は親の金で放蕩して少しばかり世間、それも極く狭い世間が分つてゐるだけだ。いや、それはまだいゝとしても、第一君には精進の心持が缺けてゐる。技巧には苦心をするだらうが、君は世間を、人間を観察しようとしたか。平易に云つて、君は君自身の人間に對して、「これでいゝ」と一人で極め込んでゐるやしないか。一人で何もかも分つたつもりになつてゐるやしないか。何よりもその點を、私は君のために惜む。

中戸川君、私は餘りに君を責め過ぎたかとも思ふ。しかしこんなことは私が今更考へたことではない。ずつと以前からの考へだ。で、この八月だつたか私は國民新聞で月評をしたとき、是非とも君の作品を読んで大いに君に苦言を呈するつもりでゐたが、相憎その月には君の作品はどの雜誌にも見えなかつた。さうして今日になつたのだが――中戸川君、今度里見氏が君に採られた態度を君はどう考へてゐるか知らぬが、或ひは其處には何等か里見氏の或る考慮が拂はれてゐるのではないだらうか。いや、だ

が――それはどうだつていゝ。兎に角、君は今にして「修養」を悟らねばなるまい。

(十年十一月)

映畫「カラマゾフ兄弟」

活動寫眞も時々面白いのに出會すが、今度の「カラマゾフ兄弟」くらゐ感心して見たものは近頃あまりない。はじめ、獨逸物であることを新聞で承知して少しは期待もしてゐたが、行つて見て全く豫想以上に感心した。

恰度私が小屋へ這入つたときそれをやつてゐた。何んでもドミトリが許婚のカザリンへ、以前借りた金のことで手紙を書いてゐるところだつたが、ふだん亞米利加物を見慣れてゐる私は、一目見て、あの靜かな落着いた畫面に引きつけられたのだつた。——沈鬱で、そして重苦しいあの畫面の空氣！ ものの五分と經たないうちに私はすつかり打たれてしまつた。

もと／＼原作の筋そのものが波瀾重疊の、謂はゞ探偵小説的なものだから、映畫にし

て面白くない筈はない。が、あの空氣は別物だ。あれは鳥渡出せるものでないだらう。深酷な、そして何んと云つていゝか分らぬ假りに露西亞的な暗さとも云はうか——そんなものが一貫して畫面を支配してゐるのだ。センチメントではない、もつとく深い、そして重苦しい氣分が滲み出てゐるのだ。恐らく、これだけでも確かにこの映畫は成功したものと云へよう。

「カラマゾフ兄弟」——あのごたくした長篇を、これだけに纏め得たのも偉い。複雑な筋を見物に呑み込ませながら、事件を展開させて行くのだ。中々大變である。それを映畫では、殆んど要所々々だけを見せて進んで行く、極めて簡潔に。——而もたゞ筋を運んでゐるといふのでなしに、どんなに短かい場面にすら非常な深みがある。役者の身振一つ、表情一つにさへ堪らない深みがある。そして、それが申分なく全體の調子に調和されてゐた。

従つて場面々々が非常に短かい。ひどいになると、今寫つたと思ふと、もう他の場面に變つてゐるところなぞもあつた。そのため事によると、この映畫を目眩るしく

感じた人があるかも知れない。が、しかしそれも肝腎な場面へ来ると非常に長く撮つてあることを思へば、こんな所にも獨逸の科學的な、頭のいい點が表はれてゐるのではないか、と考へられた。兎に角、見てゐる時には息もつまる程の緊張を感じさせながら、而も全體としては實に悠々たる落ち着いた、靜かな感銘を與へたが、これなども苦心のところだらうと思ふ。かの亞米利加物のやうな苛々しさ、騒々しさ、慌ただしさなど、微塵感じなかつた。

これらは無論脚色がしつかりしてゐるためや、撮影法の巧みなにも因るだらうが、矢張り第一には役者がいゝからに違ひない。亞米利加物などでは性格俳優とか云つて「狂へる惡魔」の役者などが深酷な方にされてゐるらしいが、一體性格のない役者なんてあるものか知ら！ 彼等別扱ひにされてゐる性格俳優は大抵態とらしい身振をしたが、へんに顔を歪めたりするが、私はいつでもそんなのを見ると、少しでも不愉快にならずに済んだためしがない。

ところで、この寫眞に出て來る役者はみな一人として性格俳優（！）でない者はな

い。それで無論態とらしいところなど少しもない。全く自然だ。そして、誰がいゝ、彼がいゝなどと云へぬくらゐ、みな粒選りだ。

それでも中では、ドミトリが一番巧くもあれば努力もしてゐる。あの、單純にもやればやれるドミトリの性格を、出来るだけ複雑にやつて、そのため非常に深いものにしてゐたのには感心した。次にスメルジャコフになつた役者も中々巧い。柄が抜つてゐるのかどうか、あの身振、表情などは鳥渡獨特だ。全くこの映畫には無くて叶はぬ役者だと思はせた。それからフヨードル、イヴン、アレキセイ——斯う舉げて來るとみんな云はねばならなくなる。

女優では、グルシエンカがカザリンから手紙を受取つて會ひに行つた時、あまり愉快でない身振や顔をしたやうに覺へるが、それも全體を通して考へると、この女優に堪らなく深い巧さのあることが分る。いくらか固い感じのしないでもないカザリンも、あの役に適つてゐるやうに見えた。どんなところであつたか忘れたが、この女の横顔が彫刻のやうに氣高く見えたのもよかつた。

たゞ、これは無理な註文かも知れぬが、終りのところで、シベリヤ流刑に決つたドミトリが神を信するところがある、あすこが少しへんな氣がしないでもなかつた。それまで神信心なぞしたことのないドミトリが、突然「神様！」と叫ぶ。無論、私は彼が突然神を認めるのをへんだとは云はない。謂ふならば、彼のその神を認めた心持とその表現との間に、私は或る隙を感じたのだ。あすこが、もう少し何んとかならなかつたものか。——尤も私のこの非難は、或ひは、ふだん亞米利加物を見つけてゐて、終り目出度しといふやつを、極度に嫌つてゐるところから來た偏狹な神經が、さう見たのかも知れないが。

(十年十一月)

女、酒、花、自動車

——大正十年の文壇を回顧して——

大正十年——今年ほど浮かれ氣味な文壇は、今まで餘り見なかつたやうである。女、酒、花、自動車、それから旅行といふ風に、流行作家は金の這入るに委せて、實際狂態の限りを盡した、と云つても差支へあるまい。去年だつたか誰れかゞ、印象の中でタクシイに乗つたことを書かれたといふので、態々「タクシイの辯」とか書いて大いにタクシイに乗つた云ひ譯に力めたことがあつたと覺えるが、去年と今年と、全く何んといふ相違であらう。タクシイはおろか、普通の貸切自動車でどん／＼飛ばすといふ豪勢振だ。「全くかうなれば文士も大したものだね、」などと皮肉の一つも云ひたくなる位であつた。原稿料が上り、文學者の物質生活が向上して來たのは無論結構なことに

違ひないが、同時に一方、かうした輕佻の風潮を做したことは見逃せなかつた。

尤も、多く金を取るものが、多く金を散ずることは理の當然で、強ち恠しむべきでないかも知れない。要は、その人々の根本の心掛け次第だ、とも云へる。一應道理だと思ふ。そして中には、如何に女を買ひ酒を飲み花をひいても、藝術上の仕事は仕事として立派にやつて行つた人があつたかも知れない。しかしさうは云つても、たとひ多少にもせよ、かうした風潮を做したといふことは、それ自身、既に如何なる意味に於ても、決していゝ結果を齎さなかつたことは争へまい。

無論、文學者は聖人でも僧侶でもない。時には、女も買へば酒も飲むであらう。が、しかし輕佻浮華に流れては感服出来ない。無暗に成金の遊興を試みたり、柄にもない不相應な暮しをしてみたり——さうしたことは、各自自分勝手だと云へばそれまでであるが、傍から見て餘り見つともいゝものではない。

この意味で、芥川龍之介氏などの如く書齋に籠居して、比較的さうした方面から遠ざかつてゐたらしい態度は敬すべきだと思ふ。

遊興と云へば菊池寛氏の如きは大分遊んだらしい。しかし遊ぶとは云つても、同氏ははつまり、その遊びが生活のほんの一部分を成すもので、毫もそれに煩はされた容子は見えなかつた。外面的には煩はされたかも知れぬが、内面的には煩はされなかつた。無論輕佻には陥らなかつた。畢竟、同氏がしつかりした人だからである。それに同氏には下品なところが少しもないのが氣持よい。それから、里見弴氏も同じく遊んだらしいが、同氏の如きも矢張り、いくら酒を飲まうが、少しも危なげが感じられなかつた。心掛けは心掛けとして、確然と別に在るやうに見受けられた。

しかし、聰明この兩氏の如きも矢張り誘惑(と解すべきか)は避け難いのか、菊池氏は來春を以て洋行すると云ひ、里見氏は創作三昧生活に入るべく居を逗子に移した。兩氏として當然の措置と考へられる。たゞ、これまで兩氏の下に隨いて、昨日は西に走り今日は東に奔つた末社の連中は、今後どうしようとするのか。末社の頭目(ヤ)宇野浩二氏の如きはもう一度諏訪にでも出掛ける乎。

新しい年は目の前だ。輕佻浮華の風　いや、そんなものは今年なかつたかも知れ

ない。いや／＼、必ずあつたであらう。そして若しそれがあつたとすれば、希くはそれは今年一年間だけのものにした。新しい年には、新しい緊張した文壇を見たい。私はこの期待が強ち徒爾でないことを思ふ。

(十年十二月)

先づ藝術に就いて考へよ

藝術とは何か——この問題はいつの時代にも繰返される。而も永遠に繰返さるべき新らしさを持つてゐる。現文壇を見渡すに、彼方を向いても此方を見ても、階級藝術の議論で耳がタコになる位である。また一方、淺薄な感傷的人道主義の喧傳も聞くことが出来る。その他、何、何と實に種々雑多な議論を以て満されてはゐるが、而も彼等は動もすると、藝術の何物たるかを忘れ勝のやうである。それは私の僻目ではないらしい。

藝術とは何か——吾々は陶器や繪などを見て、非常にいゝ感じを受けることがある。一口に云へば、つまりあの氣持が藝術ではあるまいか。それは小説に就いて云つても同様である。小説は陶器や繪などから見ると、無論はるかに複雑さは認められる。しか

し複雑は複雑でも、藝術のこの「氣持」には變りはない。吾々が小説を読んで、何んの理屈なしにビツタリした「氣持」になる。そこには思想も何もあつたものではない。たゞ或る一種の恍惚があるだけである。

このビツタリした氣持——藝術は先づ讀者にそれを感じさせるものでなければならぬ。無論それは技巧とは何んの關係もない。否寧ろ、技巧なぞといふものからはずつとく超越したものである筈だ。小説を読んで、何も考へず、何を見出さうとも努めず、自然にビツタリと胸に觸れて来る——それを私は云ふのである。それが藝術になくはならぬと云ふのである。里見弴氏が宇治の鳳凰堂を見たとき何んとも云へぬいい感じを受けて、「藝術の境地は正にこれだ。」と云つたといふ話を人から聞いたが、つまり私の云はうとするのもそれに外ならない。

と云つて私は、藝術に思想を求めるとは云はない。又その他いろんな意味を藝術から抽出することも、悪いとは考へない。それは分りきつたことである。併しながら何んと云つても、それらのものは先づ「ビツタリ胸に觸れた」上でのものでなければ

ばならぬ。先づ何んの不自然さなしに、何んの理屈なしに、「ビツタリ胸に觸れた」上でのものである。その上で始めて價值を生ずる思想であり、意味である。従つて或る小説が如何に傑れた思想を持つてゐようと、又深酷な意味を含んでゐようと、それが「ビツタリ胸に觸れて」來ない限り、藝術として到底價值なきものに過ぎない。

たとへばロシヤの小説である。ロシヤの小説は、一般に思想的と云はれてゐる。そしてなる程、さうである。しかしロシヤの小説の傑れてゐる所以は、決してその思想のためではない。第一に先づ藝術として傑れてゐるからである。今、トルストイを例に引く。トルストイが大家作家として全世界から許されてゐるのは、決して彼の思想のためではあるまい。否、彼の思想方面に至つては矛盾撞着が甚だ多く、寧ろ思想家としての資格を疑つてもいゝ冷靜さを缺いてゐる。而も彼の傑れてゐる所以は何か。曰く「藝術家」であるからだ。それは、彼が晩年漸く思想的傾向に墮してからの作品が感心出來かねるものゝ多いのにも見ても、蓋し思ひ半ばに過ぎるものがあらう。

現今、日本の批評家の中に、頻りに「思想」呼ばはりをする人々を見かける。彼等

は小説の中に思想を求めようとする。そして批評家にも思想を強要してやまない。一應それも結構である。傑れた作品が同時に傑れた思想を含んでゐる場合もあるから。——が、私が先づ彼等に望みたいことは、彼等に藝術の何たるかを知つて貰ひたい事である。一々の小説が、藝術でないかどうか、先づそれが分る能力を持つて、さうして其處から出發して貰ひたいと思ふ。小説家がその小説に於て、讀者の胸にピツタリ觸れさせるものを持たねばならぬと等しく、批評家は先づ、その小説が藝術になつてゐるかどうかを知る素質を持たねばならない。徒らに「思想」呼ばはりをする批評家達よ、君等は何等思想の片影さへ帯びない名作といふものを認めない者なのか如何。更に私は、自分の考へを明瞭にするために、此處に佐藤春夫、谷崎潤一郎兩氏の藝術を比較して見よう。

佐藤春夫の思想の如何なるものか

一口に云へば、佐藤氏と谷崎氏とを比べた場合、谷崎氏は佐藤氏よりもずっと思想的である。谷崎氏は兎に角定評もある通り、その思想は悪魔主義的傾向を帯んでゐる。が、しかし佐藤氏には如何なる思想があるか。彼には趣味や空氣はあつても、思想と名

づくべきものは殆んど見出し難い。たとへば一月の新潮に出た「卓上にあつたもの」といふ短篇である。あれなどは、極端に云へば何を書いたのか分らぬ位である。嘗つて堀木克三君が「佐藤氏には何もない。」と云つたのも、一つには佐藤氏のかうした點を指したものと見られよう。

しかし佐藤氏の藝術が思想的でないからと云つて、その藝術は詰らないだらうか。又、谷崎氏と比べてどうだらうか。——兩氏はその題材に於てかなり似通つたところがある。グロテスクと云ふか、ファンタスティックと云ふか、兎に角一種常識以外の題材を取扱ふ點で、兩氏は似てゐると云つていゝ。が、題材にこそ或る共通點は認められるが、ものは全然違つてゐる。私は短簡に云ふ——佐藤氏は本物だが、谷崎氏はさうでない。私は常に佐藤氏のものを読むと、その主題が如何に荒唐無稽であらうとも、その荒唐無稽が實は荒唐無稽でなく、そのまゝこちらへ受入れることが出来るのである。「へんなことが描いてある」とは思つても、なる程そんなことも世界の何處かにはあるかも知れんと思はれる。ウソだと思はうとしても、どうもそれが事實だ。今

の今まで其處にあつた卵が不意に紫色の細い紙のリボンに變つて窓からフワ／＼と舞ひ上がる——何んだ馬鹿々々しいと思つても、どうもそれを承認しなければならぬ。理屈で承認するのではない。では如何なる學理を以て、卵がリボンに變つたことを解き得るか。無論そんなことは、科學を以ても何を以ても解き得ないに違ひない。たゞ藝術それ自身を實在として承認しなければならぬ。つまり、その承認させるところが「藝術」なのである。そこに藝術の面白味があり、有難味があるのだと思ふ。

ところが谷崎氏はさうではない。彼の小説になると、それがどうしても在るやうには思へないのである。たとへば「AとBの話」や「或る罪の動機」などを見ても、何んだかウソのやうな氣がしてならない。作者は一生懸命に「かうだ、あゝだ」と能辯に云ひ聞かせてくれるが、さてどうにも信じられない。文章は流暢だし、中々巧いからそれに引きづられて讀むには讀むが、結局終りまで行つてもピツタリした氣持にならない。そしてただ後には、妙にチグハグな氣持が残るだけである。

佐藤氏と谷崎氏とを比べた場合、まだ多くの云ふべきことがあらう。たとへば、佐

藤氏が谷崎氏に比べて、人間としてより近代人でありより繊細だとか、又、文章から云へば、佐藤氏のは新鮮で敏感だが、谷崎氏のは古く鈍く、時には型に嵌つたやうなものもあるとか、——その他いろんなことが云へると思ふが、しかし今はそんなことにまで云ひ及ぶ必要がない。

私はただこの一點に就いてのみ云ひたい。佐藤氏の藝術は本物だが谷崎氏のそれはさうではない、といふ一點のみに就いて。——では、何故さうなのかと云ふと、烏渡説明に困難である。佐藤氏が谷崎氏と比べて、創作に努力するからといふ譯でもない。そんなことは努力するしないから來るものでは無論ない。谷崎氏のものを読むとまるでカス／＼としてゐて、その文章に神経が通つてゐない、血が流れてゐない。しかし彼自身に見れば、矢張り他の作家と同様、それで立派に神経も血も通はせたつもりなのに違ひない。——全くそれは、天分如何の問題と考へる外はあるまい。

つまり天分である。天分の稀薄な者がいくら筆達者であらうとも、要するに筆達者と云ふだけに過ぎない。そんな者の作品は、畢竟本當の藝術とは云へないのである。佐

藤氏と谷崎氏とを比べて見た場合、——いや、こんな一風變つた作家でなくとも、誰を持つて來てもいい。たとへば細田源吉氏と細田民樹氏とでもいい。源吉氏は地味である。また別段巧くもない。しかし書いてある物そのものは、兎に角受け入れることが出来る。ところが民樹氏となるとさうではない。彼の取扱ふ題材が大袈裟な點や、無暗に調子の高いところが、偶々時好に投じてはゐるものゝ、何んだかコケオドシ見たいな信用出来かねるところがあつて、逆も純粹な氣持で受け入れることが出来ない。つまり其處である。私は今のところ源吉氏を傑れた作家だとは云はぬが、しかし彼にはウツがない。また佐藤氏にもウツがない。其處が肝腎である。藝術は先づこの第一線を通過したものであつて欲しい。

思想も結構である、寓意も結構である。が、しかしすべてのものはこの第一線を通過したその後になつて、始めて價值を生ずる。従つて批評家が作品に對したとき、その作品がこの第一線を通過し得たか否か、先づそれをハッキリ見極めてかゝらねばならぬ。それもまた素質の問題である。中にはこの第一線を悟り得ない人があるかも知

れない。現にそんな人が今の批評家の中にかなり見當るやうである。そんな人は畢竟どんな主張を持つてゐるにしろ、藝術とは縁なき衆生と云ふべきであらう。廣津和郎氏の所謂「小説が分る」といふ言葉もそんなところを云つたのではないかと思ふ。

トルストイの家出と有島武郎の財産抛棄

四月號新潮の文藝時評を見ると、近松秋江氏が「好いお道樂」といふ一文を掲げて、有島武郎氏の財産抛棄を笑殺してゐる。私はそれを此頃になく面白く、且つ同感して讀んだ。全く此頃のやうに同感出来ない不愉快なガサツ極まる評論の多い中に、秋江氏のこの評論を見たことは、確かに私の喜びとするところだ、と云つても決して云ひ過ぎではない。

「好いお道樂」とは、つまり有島武郎氏の財産抛棄を云つたものだが、確かにあの一文は、有島氏の人間なり思想なりを完全に云ひ盡してゐると思ふ。秋江氏は、有島氏の五十萬圓抛棄が同氏の私有財産制度に服しないといふ思想的立場から成されるが故に不可だと云つた。そして、さういふ思想的立場からするものよりは、寧ろ内田、山下

等の富豪の寄附の方が、すつと「自分の常識に合致」すると云つてゐる。つまり秋江氏自身は私有財産を認めると云ふのだ。何故私有財産を認めるのか、簡単に云ふと、「私有財産といふことを認めなかつたならば、人間は餘り働かなくなりはせぬか。」と云ふのである。

そして「人間の欲望は無限である。」と説き、「労働ばかりが生存の目的ではなく」寧ろ「畢竟手段である。」と云ひ、更に「私有財産を認め、手段たる労働の彼方の目的には欲望満足といふ標目があつてこそ労働に就くことを厭はないのである。」と喝破し、「之は極めて幼稚な原始的な考へであつて、同時に又永劫不變の真理である。」と斷言してゐる。悉く私は、秋江氏の所説に同感するものである。斯ういふ見かたは、なる程秋江氏の謂ふ如く「常識」であるかも知れない。又「幼稚な原始的な考へ」かも知れない。が、それが「永劫不變の真理である」ことには毫も疑ひないと私は信ずる。

世間には兎角穿き違へた人間があるものである。そんな人間は、自分で拵へた窮屈な「思想」といふ籠疇の中へ、自分自身這入つて勝手に働き苦しむ。それはまア隨意

としても、困ることには、得てそんな人達は、彼自身はどうであらうとも、「人間は斯うでなければならぬ」と獨りで頑張る。他人までもその窮屈な型の中へ押込まうとする。そして、その型に嵌らない人に對つては頭ごなしに排斥する。トルストイがさうであつた。有島氏もさうではなからうか。「トルストイは彼自身考へる所があつて、家出をした。有島氏も亦た自から見る所があつて、折角の自宅まで持ちながら、それを棄ててわざ／＼借家住居をなさらうといふなら、それもお心のまゝに任して他人が敢て兎角容喙すべき事ではない。乍併それを以て他の凡ての人の行爲の規範標準とする譯にはまゐらぬ。」と秋江氏も云つてゐる。そして「趣味の乏しい人ほど手段を目的と誤解し易い。所謂社會主義も畢竟するに手段に過ぎない。」と云ひ、更に「有島氏などは父君の遺産に飽食暖衣することを潔しとせぬといふ心掛けは立派であると思ふけれど、往々、人間生存の目的と手段とを穿き違へられてゐるのではないか。」と云つてゐる。見る通り、秋江氏は「趣味」と解してゐる。なる程「趣味」と解するところが秋江氏らしいと思ふが、しかし彼等がさうした誤りに陥るのは、強ち「趣味」のためばかりではない、もつと根本的な謂はゞ或る種のセンチメンタリズムに煩はされてゐるのだと私は考へる。

りではない、もつと根本的な謂はゞ或る種のセンチメンタリズムに煩はされてゐるのだと私は考へる。

もつとも秋江氏は、有島氏の人間に就いて「なか／＼の理想家、しかも往々生一本の理想家」と云ひ、またその「思想の色彩はセンチメンタルであり過ぎはしないか」とも云つてゐる。しかし私から見れば、トルストイの家出も、有島氏の財産抛棄や借家住居も、みなその根源をたづねて見ると、センチメンタリズムのさせる業だと云ひたい。そしてそれは、「他人が敢て兎角容喙すべき事ではない」ところか、大いにその點に對つて論すべきであると思ふ。トルストイの家出も、有島氏の財産抛棄も、共に云ふまでもなく思想的立場に立つてゐる以上、従つてそこには當然その行爲が及ぼす影響が豫想出来る。どんな影響を齎すであらうか。心ある者はそれを考へない譯にはゆかない。

トルストイは、その強固な禁欲主義を立て通すためには、從來の生活を續けてゐてはいけないと悟つて、遂に家出をした。謂はゞ餘りに彼がセンチメンタルであり過

ぎたのだ。何も禁欲主義などと發心しなくてもいいではないか。そんな主義に囚はれなくてもいいではないか。

社會は、また人間は、なか／＼複雑である。そしてその複雑な社會なり人間なりを感ずれば感ずるだけ、われ／＼はその思想に自由性、柔軟性を持たねばならぬ、虚心坦懐、何事をも受入れる心持になり得てこそ、われ／＼の眼は何物をも見ることが出來、又その思想は豊富にもなり向上もする譯である。自ら窮屈な範疇を造り、偏狹な思想のうちに閉籠つて、どうして誤りなき觀察なり思想なりを生み得ようぞ！ トルストイにしても、彼は確かにトテツもない大きな人間ではあつた。が、その大きな人間が晩年、自ら狭い穴へ潜り込んだ。そして、その狭い穴から社會を見、人間を見た。針の穴から天覗く。どうしてそんなことで社會が分り、人間が分らうぞ！ 畢竟トルストイは、その人間が餘りに單純過ぎた。いや、單純と云つていけなければ、——彼はセンチメンタルであり過ぎたのである。

且つ夫れ、假りに彼のセンチメンタリズムを肯定するとしても、彼の家出はどん

なものかと思ふ。彼は主義のため家出して、さてそれで自分自身に毫も恥ぢないサツパリした氣持になり得たであらうか。無論、家にゐたときと違つて禁欲は出來たかも知れない。が、それもトルストイ自身がさうしたのではなくて、家出といふ外的な事情が彼をしてさうさせたまではないか。又、或る論者は、いや彼が結果に於てサツパリした心境を得られたか否かそれはどうでもいい、そこまで主義を生かさうとした彼のその主義に對する忠實さを尊敬すべきだ、とでも云ふかも知れない。が、私はそれにも同感出來ない。否寧ろ、彼が家にゐて「誘惑」の中で戦ひ、さうして主義を立て通してこそ偉いとも云へようが、既に彼は家にゐてはその禁欲主義がしぼ／＼破れたのである。そして、これではいけないと思つて、遂に家出をしたのである。見かたによつては、反つて彼は逃避したものとさへ考へられる。

一體に私は、トルストイの人間なり思想なりに同感出來ない。わが文壇には、随分多くのトルストイアンがゐて、トルストイと云へば文句なしに崇拜してゐるらしく見受けるが、それはどんなものかと思ふ。云ふまでもないが、私とてもトルストイが世

界的の大家であることは承知してゐる。又、無論彼が偉大な人物であることも疑はない。しかし彼の生きかた、考へかたは狭くて窮屈で、そして間違つてゐると思ふ。

早い話が或る論者はよく、眞面目とか眞剣とか、又は敬虔とかいふ語を以て、トルストイを肯定しようとする。それはまだいゝ。中には漸次、さうした考へかたが延長して行つて、トルストイのやうな生きかた——と云つては語弊があるが——以外には、眞面目といふものを認めない容子にさへ見える。と云ふよりは、眞面目といふものが甚だしく偏狭に考へ做されてゐるやうに見える。

私は此處で、かの有名なトルストイとシヨオとが應酬し合つた話を、藉りて來ることを便宜とする。シヨオは嘗つてその著「人と超人」をトルストイに送つて批評を求めた。ところがトルストイは「人生は戯れに論すべきにあらず」と答へた。シヨオはそれに「人生そのものが神の悪戯なりとせば如何」とやり返した。するとトルストイは「貴下の言葉は我を傷ましむる事甚し」と云つて澁面を作つたといふのである。私はこの挿話を意味深いものに思ふ。シヨオとトルストイ、この二人の面目が躍如として

ゐると思ふ。

ところでこの二人を並べた場合、トルストイは眞面目であるが、シヨオは不眞面目だと云ふ人があるであらうか。トルストイは無論眞面目である。が、シヨオは眞面目でないか。生一本でセンチメンタリストのトルストイは、「人と超人」を表面的に見て不眞面目と云ひ、「人生そのものが神の悪戯なりとせば」と云つたシヨオの言葉に響いてゐる。しかし物事は斯くの如く、トルストイのやうに表面如何で決められるであらうか。表面に振被つた眞面目ばかりが眞面目なのではない。否寧ろ、表面に振被つた眞面目さよりは、口では洒落警句を吐くシヨオの方が、往々、より内面的には深く眞面目であることを注意せねばならぬ。

さう云へば、人はよく眞面目、不眞面目といふことを問題にする。「あの男は眞面目だから」とか、「何しろあの男は不眞面目で」とか云ふ。が、考へて見ると、どうもその言葉の使ひかたが表面的にばかり囚はれてゐるらしい。そんな人は、一見巫山戯てゐるやうな人を見ると、頭から不愉快がつて不眞面目呼ばはりをする。しかしそれは、

餘りに單純過ぎて間違つてゐるのだ。肝腎なのは、表面に振被つたものではなくて、裡に藏したものの如何に在る。

眞面目か不眞面目か、——人々は餘りにそれを問題にし過ぎはしないか、簡單に決め過ぎはしないか。菊池寛氏に依れば、武者小路氏は「シヨオは悪い洒落だ」とか譏したとかいふ。多分武者氏は、シヨオを不眞面目だとも云ふのだらう。いや、それは武者氏に限らず、一般に一本調子な頭の簡單な人ほど、物事を表面で決めたがるものである。しかしわれ／＼は、例へば人生は酒場だとか云つてゐる大泉黒石氏と武者氏とを比べて、武者氏は眞面目だが、大泉氏は不眞面目だと斷言出来るであらうか。又、財産を抛棄して主義に忠實たうとする有島武郎氏と、その有島氏を笑殺した秋江氏とを比べて、有島氏は眞面目だが、秋江氏は不眞面目だと斷言出来るであらうか。まことにわれ／＼はそこまで疑つて行くべきであると思ふ。

さて、トルストイのやうな、又小さくしては有島武郎氏のやうな、さうした眞面目さには私は大して價値を認めない。繰返して云ふが、私はもつと人生を複雑なものと

見てゐる。兩氏の如く範疇の中で力み返つて見て、果してそれで人生が分るであらうか。家出も不可、財産抛棄も不賛成——失禮ながら私は敢へてさう云ひたい。

(十一年四月)

和解の論争

横合から飛び出して、餘計な口を利くやうであるかも知れぬが、志賀直哉氏對福士幸次郎君の論争は、此頃面白いものゝ一つであつた。志賀直哉氏の自信の強い、倨傲な態度も見ものなら、福士君の愚痴混りの辯駁も可笑しかつた。

事の起りは、福士君がその評論文「批評の職分とは何ぞ」(新潮二月號所載)に於て志賀直哉氏の作品「和解」を譏したのに因る。それに對して志賀氏は、怒つて「唇が寒い」(新潮三月號)を以て酬い、福士君の悪文家であること、頭の悪いこと等を指摘し、更に「和解」に就いては「然し「和解」は自分の今までの作中でも代表的ないゝものである」と反駁した。而もその反駁文は、頗る自信の強い、福士君に云はせると「傲慢」な態度で書かれてゐるばかりでなく、又、随分福士君を馬鹿にしたものであつ

た。が、それも志賀氏にして見れば、自信のある作品を惡口されて、怒るのは當然であると思ふ。そして又、福士君が馬鹿にされるべく相當な言葉を吐いたのなら、志賀氏のあゝいふ物の云ひかたにも、大して不思議は無いと思はれる。

が、又一方、福士君が福士君で、それに腹を立てたのも無理で無い。(「文章の辯頭の辯」(新潮五月號) 福士君は、志賀氏の「見つともない感情を丸出しにしてゐるのに、腹が立つより何より唯だ情けない氣で一杯になつた」と云つて、「だがわたしは自分の希望する藝術の上から、この兒戯に類したことを云ふ僭上者を痛い目を見せてやらう」と云つた。そして「和解」は、作者志賀氏が何んと辯解しようとも悪作に違ひないと決め、志賀氏の言葉を「子供ぢみた藝術解釋」と譏し、「今少し骨つほい思想」を要求したのである。——或ひはこの場合、他人が容喙すべきで無いかも知れぬ。然し私も、亦福士君の謂ふ如く、「自分の希望する藝術の上から」敢へて「和解」に就いて、そして延いては福士君に就いて、「痛い目」ではないが、云ひたいことがある。

私が「和解」を読んだのは、あれが雑誌黒潮に掲げられたときで、今からは大分以

前のことだ。従つて最早や作の細かい部分は覚えてもゐないが、然しその漠然ながら残つてゐる印象に依つて考へても、私は、福士君の所論に反対しなければならぬのを遺憾とする。

私の考へるところに依れば、總じて志賀氏の作品は、その殆んど云つていゝ位、みな大抵同じ程度の出来榮を示してゐると思ふ。志賀氏の作品が、文壇的に見て如何なる位置を占むべきかといふ問題は別として、又、志賀氏の作品がそれ自身いいものか詰らないものかといふ問題をも別として、兎に角志賀氏の諸作に、種々の段階を附け得るであらうか。それは出来ない、と私は思ふ。その點志賀氏ほどムラのない作家は現文壇にも少ない。

で、そこで私は、何故福士君に於て「和解」が——「和解」だけが——「代表的な悪作」となつたかといふ點に就いて考へねばならぬ。「和解」が悪作なら、志賀氏の諸作は大抵悪作である筈だ。而も福士君は、「和解」に「代表的な悪作」といふ文字を用ひた以上、「代表的な傑作」のあることを豫想したに違ひない。且つそれ、そんな文字

の末に拘泥しなくとも、大體に於て同君は、志賀氏の傑れた作家であることを認容してゐたではないか。決して私は、強ちに志賀直哉黨を以て立つ者ではないが、然しその點福士君の云ひ分は通らないと思ふ。

斯うなると私は、では「代表的な傑作」とは何を指すのか、如何なる點で志賀氏を認めるのか、先づそれを福士君に訊ねなければならぬ。——たとひ福士君が二度目の「文章の辯頭の辯」に於て、志賀氏の作品を「部分的價值」しか無いと云ひ、「藝術全部から考へたら中のあはれな一部分に過ぎない」と譏したと云つても、なほ且つ同君は「批評の職分とは何ぞ」に於て、明瞭な言葉を使つてこそゐないが、大體に於て志賀氏を認めただけだから。——

否、事によると福士君は、全然作家としての志賀直哉氏を認容しないのではなからうか。そして「代表的な悪作」といふ言葉は、寧ろ志賀氏の殆んど全作品が悪作である中でも、殊に「和解」が最も悪作だ、といふ位の意味ではなからうか。又、大體に於て志賀氏を認める口吻を洩したのは、それはたゞ文章上の勢ひその他の然らしめただけ

のもので、その實福士君の本音はそれとは反対なのではなからうか。——かう考へる方が、福士君のために心切なのかも知れない。甚だ遺憾ながら、福士君の眞意はそんなところにあるのではないか、と考へるの外は無い。

然し何れにしろ、私の福士君に対する遺憾は除かれない。「和解」を取りたて、悪作と云ふ福士君も遺憾なら、又それと反対に、全然志賀氏を認めないと云ふ(私の推量)福士君も遺憾である。謂ふならば、その何れにしろ、福士君の小説鑑賞眼を疑はねばならないからである。

「和解」に就いて、「事實を只その儘に書いて行つて、それで藝術品になつてゐるからいゝ」と云つた志賀氏の辯駁、「かういふ場合の親の感情に人道主義的も自然主義的もあつたものでない」と云つた志賀氏の反駁、——それに對して、福士君はもう少し考慮を拂ふべきでは無からうか。福士君はそれを「子供じみた藝術解釋」と嘲り、「觀照などといふ事はそつちのけの解釋」と譏した。そして「今少し骨つほい思想」を要求した。が、それはどんなものかと思ふ。

もつとも腹が立つてゐた時である。既に、福士君も馬鹿な車夫に擬せられて、癪に障つたに違ひない。その終りへ行つて、相手の反駁を聞いても、それが素直に受け入れられないのは無理でない。が、それは兎も角として、何故志賀氏の言葉が「子供じみた藝術解釋」であらうか。あれで立派に云ひ開きになつてゐるではないか。總體に私は、福士君の「和解」評に同感し得ない一方、「唇が寒い」に於ける志賀氏の態度の倨傲は認めるとしても、その「和解」辯護の條りには大體同感するものである。

一體福士君が「今少し骨つほい思想をもつて」云々と云つてゐるのが、私には分らない。なるほど「思想」は重要なものである。實は私如きは長い間、藝術に携はる者の「思想」の輕蔑すべきを知つて、その重要視すべきを知らなかつた。そして此頃になつて漸くその非を覺り、大いに研鑽修養に力めてゐる次第である。が、それとこれとは場合が違ふと思ふ。如何に「思想、思想」と云つて見たところで、藝術はなるほど「思想」で「解釋」は出來るとしても、然し結局「思想」で藝術(この場合小説)が分るものでは無い。謂はば、小説が分るのは、矢張り藝術的な或る「ところ」である。

志賀氏の辯駁にしても、如何に「骨つほい思想」が無からうと有らうと、あれで十分なのだと思ふ。

私は今、志賀直哉論をしようとも思はなければ、また問題の「和解」に就いて、これ以上云ふ必要も認めない。何故なれば「事實を只その儘に書いて行つて、それで藝術品になつてゐるからいゝ」と云つた志賀氏の言葉や、「かういふ場合の親の感情に人道主義的も自然主義的もあつたものでない」と云つた志賀氏の言葉などを一顧すら與へようとしなない福士君であるからだ。若しそれで、福士君の理解を得ることが出来なければ、この場合私はかの批評家として私の尊敬する（この際特にその感の深い）廣津和郎氏の傑れた「志賀直哉論」を、福士君に勧めることを差當りの便宜とする。そしてただ私は、志賀氏には例へば「或る朝」といふ僅々三四頁の短篇の如き、文壇では一言の批評も無かつたやうであるが、優にチェホフにも劣らぬものさへある、と云へば足りると思ふ。そして更に「和解」も、それに比べて別段遜色を見ない、と云へば足りると思ふ。

斯く述べ來つて私は遂ひに、其だ僭越であるかも知れぬが、福士君は小説の分る人ではない、といふ結論に到達せねばならなくなつた。もつとも私は、福士君を「藝術家」だとは思つてゐる。宇野浩二氏の「文藝閑話休題」に俟つまでも無く、詩といふものに縁の遠い私であるが、なか／＼福士君の詩にも敬服してゐる。淺薄な感傷的の意味でなく、同君の詩は讀んでゐて快い氣持にもなれるし、なか／＼藝術的などころのあることも認めてゐる。そして、それと同様に福士君の評論も、時にはまるで筋の通らないやうな文章でありながら（例へば人間所載「文學評論」の如き）、而も一種藝術的な面白味や陰影があつて、確かに現在ガサツ極まる評論の多い中で、いゝものだとは思つてゐる。その「プロレタリア思想の不成立」は讀まなかつたが、枝葉の點は何うであらうとも、究極の意見に於ては、現在の評論家中、私の同感出来る人の一人だとは思つてゐる。が、遺憾ながら同君は小説が分らないらしい。

既に「和解」評がそれを證據立てゝあるばかりで無く、さう云へば、總て福士君の文藝評論には随分いろんな現代作家が繪玉に上げられてゐるが、而も同君は例へば「菊

池寛の何々」とか「芥川龍之介の何々」とか、その多くの場合一言か二言かで貶し去つてゐるのは可笑しくは無いか。菊池氏なり芥川氏なりが凡庸作家であるか否かは別として、果して福士君にそれぞれの小説がどの程度に分つてゐるのであらうか。打ち見たところ頗る晦澁な文章でありながら、その實、なか／＼用心深げなところの見えるのが、福士君の評論である。その用心深げな福士君が作家を評するとき、一言か二言かで貶し去る！ 其處に何等か因つて來るところがありはしまいか。と云ふよりも、一言か二言かで貶し去つて平然たり得るところに、同君の小説が分らぬ所以が認められはしまいか。どうも福士君には細かく小説を味はうといったところが無いやうに思はれる。早い話が同君に月評でもして貰へば、それが明瞭になると思ふが。……

恐らく福士君は、小説を評する場合、或ひは小説と「時代」の関係、或ひは小説の持つ「思想」とその分析、その他これに類する意味でなら、小説を「解釋」し得るであらう。云ひ換へれば、同君の所謂「骨つほい思想」でなら、小説を「解釋」し得るであらう。つまり福士君は、その本來が「藝術家」でありながら、而も小説を評す

るとなると「骨つほい思想」で行くらしい。もつとも其處が福士君の「藝術家」でありながら、一面「學者」たる所以でもあらうが。

私は嚮に、小説の分るのは或る藝術的な「こころ」である、と云つた。藝術的な「こころ」と云つただけでは、或ひは理解して貰へないかも知れぬ。「今少し骨つほい思想をもつて」解釋せよと云はれるかも知れぬ。然しそれは出来ない。少なくとも私は、出来ないと思ふ。また如何にそれが「骨つほい思想をもつて」解釋されて見ても、結局それはそれで「骨つほい思想」の解釋に止つて、畢竟直接に小説（藝術）とは縁の無いものになり終るであらう。即ち、其處が結局「藝術」と「思想」との岐れるところである。其處まで行くと、最早や「思想」が「藝術」と何んの関係も無くなつてしまふのである。

繰返して云ふ。——「藝術」の分るのは、矢張り藝術的な或る「こころ」であつて、「思想」でも何んでも無い。その意味から、藝術の分る人は矢張り「藝術家」でなければならぬ、とも云へる。斯う考へて來ると、時々作家達が没分曉の批評家に腹を立

て、批評家を輕蔑する如き口吻を洩すのなども、(例へば志賀氏の福士君に對するのなども)遺憾ながら無理からぬ譯である。又、作家の批評はいい、といふことも意味の無いことでは無い。殊に現在の如く、「藝術家」である批評家の殆んど見當らない時にあつては。――

(十一年五月)

「幸福の國へ」の作者

加藤武雄氏の最近の創作集「幸福の國へ」を通讀して見ると、この作者は最早やすつかり完成しきつたことがわかる。收められた作品十二篇、どれをとり上げて見ても、纏まりも纏まつてるし、巧さも巧い。その上また、作者のこれまでの作品と違つて、いくらか其處に別趣なものが見られるやうになつて來たことも事實である。

元來加藤氏の人間は、別段強い理想主義者でもなければ、また何々主義と云へるほど、明かな主義の持主でもない。が、さうかといつて現實にも満足出來ない。何かしら胸に或る憧憬を抱いてゐる。そしてその憧憬は、多分に浪漫的であり、空想的であつて、やがてそれはこの作者をセンチメンタルにさせる性質のものである。畢竟彼は、現實が不満ではあつても、その現實に喰ひ入つて其處に憧憬――若くは理想――を

見出さうとするの類ひではなくて、寧ろその現實以外のところに憧憬を求めるといつた側の人である。この作者のこれまでの作品は、大抵みな彼のさうした人間の所産であつた。この創作集について見ても、巻頭の「幸福の國へ」を初めとして、「奇禍」「春畫」「拳」「婚約」等、まづその部類に入れらるべき作品であらう。

きれうよしの一人娘の幸福を思つて遠く朝鮮迄嫁にやる爺さん、爺さんは大きな百姓家の納屋で死に瀕しながらも、なほ且つ心は遠く娘の幸福なるべき生活を夢見てゐる。娘は朝鮮へ嫁いだが、豫期に反し亭主は無頼漢なので苦勞する。そして父親の病氣を心配して内地へ歸つて来る。しかしその時にはもう爺さんの意識はたしかでなかつた。娘は朝鮮の夫の所へ歸りたくないのだが、腹にある子供のために決心したやうに歸つて行く。これが「幸福の國へ」の荒筋であるが、この、娘の幸福を夢み、また自分の過去のいゝんな出来事を追想して樂しんでゐる爺さんの心持こそは、やがて作者の心持ではなからうか。また、淫賣婦にまで墮落した女が、客に連れられて山の温泉に來て過去の生活を振り返り、自分のからだの衰へを慨き、或ひは若き日の戀をしの

びなどしてゐるとき、俄かに彼女の乗つてゐる自働車が谷底に墜落するといふ、「奇禍」の女主人公の追懐の心持など、其處に私は、作者の人間の發露を見ることが出来ると思ふ。

これらの作品は、讀んでゐて少しの不純も感じないし、また極めて氣持がよい。しみじみとして優しく、また懐しみもある。全くそれだけのものとして申分の無いものである。が、しかしそれだけではわれわれが不満である如く、作者らそれに満足出来なかつた。實際さうした作品は、餘り複雑なものではなかつた。深いものでもなかつた。さうした作品に盛られた思想や感情は、謂はゞかなり單純であり、また淺かつた。恐らく作者はそれを不満としたのに違ひない。

今それをこの創作集によつて檢べて見るに、先きに從來の傾向に屬するものとして擧げた「奇禍」にしても、若し作者が全然從來の儘の作者であつたならば、恐らくはあの淫賣婦の乗つた自働車を谷底に墜落させはしなかつたであらう。そしてたゞ、女をして過ぎし若き日を追懐させるに止めたであらう。作品の出来榮から云へば、自働車

を突然墜落させたのはかなりへんで、チグハグな氣をさせるにはさせるが、しかし女が涙を流して追懐してゐる最中に墜落させたところに、私は作者の或る新意を見出したいと思ふ。

批評家はよく作家に對つて「轉換々々」と轉換を望む。そして作家も亦、行詰るところを何より恐れて絶えず轉換を心掛ける。つまり、完成と轉換とが交互にやつて來て作家はますます大きく偉くなるべきである。或る完成へ達したら、また其處で轉換を心掛けて新しく踏み出す。そしてやがてその轉換が行はれきつたら完成へ達する初めである。と、また轉換——完成、といふ具合に悉ゆる作家はさういふ心掛けであつてこそ、精進も出來、偉大にも成り得るのである。加藤氏が轉換を心掛けたのは正に當然であつた。

が、轉換といふことは中々難事である。口では云へても、實際は難かしい。加藤氏がそれを心掛けたとは云つても、一朝にしてそれに達しられないのは當然である。其處に、迷ひ、疑ひ、苦しみが生ずる。では、加藤氏の轉換を志した方向は？

既に加藤氏は、自己の人間の或るものを飽き足らすとした。自己の或る一部分のみの盛られた作品を不満足とした。自分にはもつと面白いところもあれば複雑なところもある、こんな生温い（或る意味でさう云へると思ふ）筈ではない、と加藤氏は自分で自分に腹立たしくなつたらしい。さうした心持の結果として、加藤氏に一番始めにやつて來たものは自己嘲笑であつた。自己皮肉であつた。何んだ、こんなものを書いて！ヘッヘッ！加藤氏は自分で自分を嘲笑し皮肉つた。が、嘲笑と云ひ皮肉とは云つても、それは辛辣骨を刺す類ひのものではない。寧ろそれは、彼の人間にある懐しみを帯びた、あたゝかいものであつた。即ち、加藤氏の轉換の第一歩は、懐しみの融け込んだユーモアとなつて表はれたのである。

「藥草の花」に出てゐる空想家で何事を企てても失敗ばかりする父にしてもさうである。作者はあの父が作者自身に等しい人間であることを知つてゐるのかどうか明瞭でないが、その父は今度も大いに儲けると云つて藥草を植ゑる。ところが漸くそれが收穫時になる前に戦争が濟んで藥の値段が暴落する。父はまたアテが外れた位に思つて

その草をその儘に抛つておくといつか綺麗な花が咲いた、といふのが作の骨子である。愛すべき父よといった調子で、いくらか作者は滑稽化して書いてはゐるが、しかしそれだけに懐しみ易いユーモラスな作品になつてゐる。

「復讐」もまたさうである。殆んど許嫁同様になつてゐた男が、ふとした心からカフエーの女と同棲したために、失望した女は基督教に走り、そして無趣味な醜い牧師と結婚する。男は後にそれを悔いて女の許へ歸らうとするが、しかしもう時はおそい。男は女にその夫の牧師が醜いことを冷笑しようとしたが、女はそれには構はず男の前で夫に親切を盡して、如何にもその夫に満足してゐるやうに見せる。男は冷笑など出来なくなつて却つてそれが苦痛になる。——この作に於ても、夫といふ人物が必要以上滑稽化されてゐるために、「復讐」は復讐でも、寧ろさういふ烈しい氣持がしないで、軽いユーモラスな味ひになつてゐる。その他「遺留品」「花嫁」「或る童話作家」「婚約」など、出来榮の點は別として、皆さうした味ひの作品である。

たゞこの中で、「遺留品」は割に正面からぶつつかつて描かれてゐる。小さな時戀心

を抱いてゐた遠縁のお澄といふ女が今は淺草の淫賣婦になつてゐる。彼女はこの頃その家を抜け出して來たが、さて前借を拂はねばならぬし、荷物もとりに行かねばならぬ。彼女の父はその交渉を彼（主人公）にたのむ。彼はお澄には十年前から會はぬが人道的な氣持からその掛合に行く。しかしその家の女將からお澄の情夫と思はれてからかはれたり、また持つて歸る荷物が重かつたりして俄かに癪に障つて來る。からかつた女將が癪に障るのぢやない、お澄が癪に障るのだ。が、そのお澄には十年も會はぬので今の姿が想像出來ぬ。結局彼の腹立たしさは、そんな役目を演じてゐる自分自身に返つて來た。それがやがて彼を憂鬱ならしめ、唇に濃い苦い笑ひを湧き上らせた。

——同じくユーモラスな作品ではあつても、この作は正面から平押し書いてあるために一層の効果を上げてゐる。畢竟、企んだユーモアでなくて、題材そのものから來る、そして現實にチカにぶつつかつたところから來る、自然なユーモアなので感銘が一段と深いわけである。

「遺留品」とものは違ふが、卷末の「河内屋與兵衛」もさういふ意味での力作であ

る。これはまた、ところ／＼妻いほど突込んで描かれてゐる。矢張りこの作も、作者のよく取扱ふ互ひに喰ひ違つて行く二つの心を描いたものであるが、そして其處から生れる悲劇を扱つたものであるが、やゝもすると説明（描寫）し過ぎたかと思はれるまでに精到である。幼い時から姉のやうに慕つて來たお吉が婿をとつた失望から放蕩に身を持ちくづす與兵衛、そして親から勘當されて後はじめて改心しようとしてお吉に金の無心を云つて断られ、餘りの意外に腹を立てゝ女を殺す。——さうした心理の動きかたが遺憾なく描き出されてゐる、かなりいい作品である。

さて大雑把ながら、個々の作品については大體述べた通りである。初めにも書いた如く、この作者のものは今やいづれを佳作とし、いづれを駄作とする如きことは出來ない。みな等しく出來上つてゐる。それがやがて作者自身不満を感じて轉換を心掛けしめたのであるが、そして私もまた大いにそれを期待してゐるのであるが、しかしわれ／＼は、加藤氏が好人物であるからと云つて、それをいけないとは云はぬ。決して悪人になつて貰ひたいとは云はぬ。例へば、「遺留品」の主人公が淫賣婦の家へ荷物をと

りに行つたとき、其處にゐた女に「こんな所からは早く出なけりやいけないな」とか「一體どうしてこんな所へ落ちて來るんだらうね」とか人道的な説教をしてゐるのを、私は強ち詰らないことゝは考へない。寧ろさういふよりも、その時女將にからかはれたり荷物が重かつたりして、そんな役目を演じさせた女を憎む氣持、そんな役目を演じてゐる自分自身を嘲笑する氣持、——さうした氣持がその場限りの單なる自己嘲笑や自己皮肉でなく、もつと作者の人間の根本を揺がすほどの氣持になつて貰ひたい、と希望するのである。既に轉換の第一歩を踏み出した作品が、また／＼軽いユーモアを自ら楽しむでなぞゐないで、更にもつと眞剣に突込んで貰ひたい、と希望するのである。

「妻のいひ分」といふ小品の書出しを見ると、主人公が「外へ出て友達などゝ語り興じてゐる時は、まだ二十臺の氣持がする」が「自家へ歸つて、三人の子供が小さな頭を並べてゐるのを見ると」おれも親父になつたと思ひ、詫びしい氣持になり、呪はしくなるが「矢張り可愛いことは可愛」。そして可愛ければ可愛いだけ、その可愛がる心

持が腹立たしい気がする。妻君から子煩悩と云はれて、「馬鹿いへ！」と言葉では冗談らしく、しかし腹の中ではかなり眞剣に云ふ。だが、それが妻君の云ふ通り事實だ、と氣づくとなほ更腹立たしい。「つまり子煩悩な親父になる事が、何んとなく墮落の如く感じられる」と書いてあるが、蓋しこれは作者加藤武雄氏の正直な告白ではなからうか。そして、さうした心持を突込んで行くところに、この作者の將來が見られるのではなからうか。

(十一年七月)

谷津温泉にて

×日

船が河津へ着いて、艇で陸へ上ると、氣のゆるみのせるか、忽ちからだの疲勞を覺えた。船の中で知合になつた石橋氏は、宿の方へ電報を打つて置いたと云ふが、出迎へらしい者の姿も見えない。狭い所だから俣も無い。仕方なく、荷物は附近の駄菓子屋へ預けて置いて、石橋氏とその娘の喜久代さん、それに僕の三人は、午下りの照りつける太陽の中を、ぶら／＼宿の方へ歩いて行つた。

宿の石田屋は、船着場から五丁ばかりの所にあつた。河津村字谷津區の區長とかをしてゐるといふ宿の主は、なる程石橋氏からも聞いてゐた通り、寧ろ頑固に見えるほど物堅さうな、年はもう六十をすつと越した白髮白髭の老人だつた。

「さうですか。へんですな、電報は参りませんが、……」と、主は朴訥な男子でさう云つて、眼鏡の下からじろく／＼と僕達を眺めたりしたが、それも氣持わるくはなかつた。石橋氏は此處は人から聞いて來たので、氏自身も初めてなのだ。兎に角部屋へ通ると直ぐ、裸になつた。

部屋は初めから田舎の旅籠屋ぐらゐの積りでゐたが、その割に感じがいい。それに湯が透き徹つて、絶えず溢れてゐるのが何よりである。

夜、家にゐたらまだ宵頃の時刻に蚊帳へ入つた。家へ葉書を一枚書くうちに眠くなる。

×日

女中が雨戸を開ける音で目が醒めた。六時半だ。家でなら眠入りばなの時刻だが、妙に追立てられるやうな氣持で起きてしまふ。

十時頃、東京へ歸る石橋氏を、喜久代さんと一緒に船着場まで見送つた。同氏は長くは商用を手離しかねるので、娘さんを残して置いて、さきに歸るのだ。——石橋氏を

乗せた船は、すぐ遠ざかつて行つた。二人はいつまでも崖の上に突ツ立つたなり、黙つてその方を見てゐた。

午後、二時間ばかり午睡。それから海水浴、いや川口で泳いだのだから河水浴だ。しかし、それももの十分と經たぬうちに疲れてしまつて、しばらくは川べりの氷店の床几に腰を卸した。そして、東京にゐては振り向きもしない氷水をうまさうに呑んだりした。

宿へ歸つた。蒲團を敷かせて寝轉びながら、此間加藤武雄氏から貰つた同氏の近著「彼女の戀人」をひろげてみた。「みじめな戀の話」はいつか雑誌で讀んだものだが、他の三篇は僕には初めての作品である。「無花果」「三宅先生とその子」、それから「彼女の戀人」の三篇ながら、その纏めかたのうまいのにはいつもながら全く感服の外無いが、それでゐるとしても飽き足りない、面白くない。まア謂はばこんなのは普通小説とも云ふんだらう、などと思ひながら、それでも小さな本だから、ぢきに讀んでしまつた。……氣が付くと、いつか電氣が來てゐた。部屋の横を流れる小川の音に混つて、

蟋蟀が啼く、蛙が啼く。耳はひとりでにそれに牽かれて、いつになく僕は詩人になつてゐた。が、間もなく、何處からか聞えて来る浪花節に氣を取られてしまった。蚊帳をつりに来た女中の話では、明晩から掛かる浪花節芝居とかの連中が向ふの宿屋に泊つてゐるから、多分その稽古をやつてるのだらうといふことであつた。

×日

外へ出たついでに、小綺麗な菓子屋があつたので、ウエーファースを一罐買つて歸ると、女中がそれを見つけて「よくありましたねえ。」と、ひどく感心してゐた。尤も三人ゐる女中の中で、この女は東京へ奉公に出たこともあるので、ウエーファース位は知つてゐたのだ。これも東京にゐたことのある料理番の勝さんの話では、全く女中が無くて困る、土地にゐても東京へ出ても結局残るのは同じ位か、悪くすると却つて東京へ出る方が金遣ひがあらくなつて残らない程だが、それでも年頃になると娘はみな東京へ出たがつて、中々土地で奉公しようとしないうさうだ。

「妙ですねえ。そんなに東京がいいんですか知ら。しかし娘はお嫁に行つたが最後、

まア東京なんかへ行く機會も無いといふ考へから、見物かたぐい出掛けるのが重もです。」勝さんはさうも云つた。

あたりウエーファース位で、女中をして輕蔑せしめたこの土地は、それも道理、全く何一つ碌なものを賣つてゐない。どんな邊鄙にもある土地々々の名物さへ、此處には何も無いのだ。

たゞ、最初心配してゐた宿の食事は、その割にいゝので助かつた。海邊であるうへに、川を控へてゐる此處は、海魚にも川魚にも不自由はしない。僕は大きくて鮎を好まぬので、日々三度に一度は缺かさぬ鮎の料理もそれほど有難くないが、鱸の刺身など毎度食膳に上るのは嬉しい。

×日

此處へ来てから、今日でもう一週間以上になるが、まだ何も手が附かぬ。これではならぬ、と机へ坐つて見たが、又三枚ばかりで、蒲團の上に仰向きになつてしまつた。妙にからだが疲れてゐて、頭はまるでウツロ同様、何を考へる元氣も無い。朝が早

いものだから午睡をする。午睡から起きると風呂へ入る。横になる、と云ふ風で、この所宇野浩二氏ぢやないが、毎日部屋には蒲團の敷きツばなしだ。

夕方、退屈なまゝに濱へ散歩に出る。氣がつくと、足まで、フラフラして、へんに手ごたへ（いや足ごたへ）が無い。それでも海邊へ來ると、流石に氣持がよい。それに眺めが又格別だ。大磯だとか、關西の須磨、舞子などの海岸は、すべて平地の海で眺めが單調だが、此處は海とは云つても、景色が非常に變化に富んでゐる。海拔何百尺どころの餘り高くない山々の起伏が向ふに見渡されて、その盡きるところ、ぐつと海邊へ突き出てゐる。しかも宿のあるあたりまで來れば、もう修善寺なぞのやうに、すつかり山の氣分だから面白い。が、又それでゐて修善寺のやうな狭苦しい眺めではない。全く此處は、宿にゐては青田を隔てた山を眺め、海へ出ては海と山の眺めが一目で恣まだ。……なぞと云へば、いつばし僕が自然に親しみを持つ人間のやうに思はれるかも知れぬが、實は僕はどうも自然よりも人間の方により興味があるらしい。

いつか何かの本で、繪の本當に好きな人は一枚の繪でもいつまでも／＼長い間眺め

てゐる人だ、とか讀んだことがある。僕はその時、自分が常に繪が好きでよく眺める方なので、その言葉にも大いに同感したのであつたが、さて考へてみるとその言葉は移して以て自然に對してもさう云へはしないだらうか。自然も矢張り繪と同じく、それに本當に親しみを持つ人は、いつまでも眺め飽きぬのではなからうか。

ところで僕は、繪ならいつまでも眺め飽きない僕は、それが自然だと直ぐ眼に慣れてしまふやうだ。いゝ景色を見て、こいつあ素敵だと思ふ、打たれる。その點は人並みらしい。いや、打たれるだけなれば、僕なんか人一倍烈しく打たれる方でないかと思ふ。が、どういふものか、打たれた次の瞬間にはもう、その景色に對する興味は半減されてゐるのだ。無論飽かず眺めるといふやうなことは、到底僕の成し得るところではない。自然を友とするなんてことは僕の柄ではない。いや、我慢にも退屈で堪らないだらうと思ふ。

が、その代りには僕の興味は、飽くまでも人間に在る。人間と人間との交渉、その心理、其處に僕の興味がある。それになら、僕は何處まで這入つて行つても、退屈はしな

ささうだ。そして、これは我田引水になるかも知れぬが、自然よりも人間の方が、より複雑でもあれば微妙でもある、と僕は自分に都合のいゝやうに考へてゐる。徳田秋聲氏などもその方ではなからうか。秋聲氏の作品に殆ど自然描寫の見出せないのが、さういふ氣をさせる。

×日

夜、宿の主に鯨舟を見に行かないかと誘はれる。そこで向ふの部屋にゐる學生、喜久代さん、それに僕の四人で出掛ける。

濱橋まで来ると、だいぶ舟が見え出した。濱橋と云へば、この橋の上からの月の出の眺めは又格別ださうだが、相憎この頃は月が無いから残念だ。と云つて、闇夜だからこそ、鯨舟が見られるわけだけれど。——杳か沖の方に點々と火が見えるのはその舟である。恰度それは、深夜高臺から東京の街を眺めたやうである。一つ二つと算へて見るが、そのうちに算へたのと算へないのがゴツチャになつて分らなくなつてしまふ。

「随分出てますねえ。幾艘位あるでせう？」

「さあ、三十艘はありませうなあ。しかし今夜はナモト（波元ならん）が高いから、あまり出てない方なんです。多いときになると、ずつと稻取、見高からこの濱まで、まづ二百は大丈夫ありますよ。それが一目なんですから中々綺麗なものです。」

一つ向ふの海岸の見高は、入海になつてゐて、突き出た小山の彼方にチラ／＼と闇に浮いてゐる。海は物凄く波立つて、夜目にも仄白く光つてゐる。

私達は岩に腰を卸してゐた。主のお爺さんの話では、昔鎮西八郎爲朝は大島へ流されるとき、この見高のむかふ、稻取の濱から渡つたさうだ。大島へは八里、此處からもよく見えるが、何んでも稻取には爲朝が書き残した旗が今に残つてゐるけれど、それが絹地なものだから、最早や殆んどボロみたいになつてゐるといふことである。

「さう云やア、爲朝が大島へ流されて後、琉球へ渡つて王様になつたといふ話がありますね。あれは傳説同様人には信じられてゐませんが、それについて満更それが嘘だとも云へない證據があるのですが——」と云つて、お爺さんは次のやうな話をした。

たしか五六年前のことだ。稻取の漁師が八人ばかり鮪を漁りに大島の沖合に出てゐた。ところが恰度、相憎のしけになつて來た、櫓は壞れる、といふわけで、その小さな舟はひとりでに流されるより仕方無くなつた。そして何方が陸とも分らぬ大海の眞只中を三十日以上も漂つてゐた。無論漁師はどうせ命は無いものと覺悟を決めてゐたが、中で頭に立つた男といふのは萬事用意のいゝ方で、皆の者が一俵積んで來た米を思ふ存分食べようとしてもどうしても承知しない。そして米は毎日少しづつ、嚙ぢらせるやうにして、出來るだけ長く持ち堪へようとした。ところが、三十二日目とか三日目とかにたうとう陸が見えて、漸く救けられた。

「その上つた所といふのが琉球なんですがね。漁師の家でも無論もう死んだものと諦めてゐたさうですが、實際よく助かつたものですよ。しかしそれから考へ合せると、爲朝が琉球へ渡つたといふのも或ひは本當かも知れませぬ。兎に角、大島の沖合へ船を出して、そのままどうもしないで抛つて置くと、船は自然に琉球の方へ流されて行くらしいのです。漁師はそれを潮と云つてますが、つまり爲朝もどうかして、舟で

その潮に流されて琉球へ漂ひ着いたんぢやないんでせうか。」

お爺さんは少し得意らしくさう云つて、なほも語り續けた。僕は杳か沖の方に明滅してゐる何處とも知れぬ燈臺の火に見入りながら、爲朝の琉球行の話を面白く聞いてゐた。

宿へ歸つたのは十時少し前だつた。蚊帳へ這入つたが、ひるま午睡を過ぎたためか、いつまでも寢入れなかつた。

芥川龍之介稱讚

はしがき

芥川龍之介氏はよくも悪くも、随分世評——否、文壇評——に上る作家である。而もその文壇評なるものが之亦、随分見當外れなのがが多いやうである。思ふに、人々が芥川氏を理解してゐないせゐでは無いか、と思ふ。では、お前は彼を理解してゐるつもりなのか、……先づそのつもりである。そのつもりの上に立つて、私は彼を「稱讚」しようとするのである。

ではどれ位理解してゐるか、と云へば、以下私の述べる所を読んで頂くの外は無いが、考へてみると、彼を悪く云ふ人の大抵は、彼に反撥してゐる爲めでは無からうか。

如何に彼を悪く云ふ人でも、彼を才人とする點では異議は無いらしい。而も彼等は先づ彼の才人である點に頭から反撥してしまつて、それ以上彼を理解しようとする深切を持たないらしい。今假りにさうとすれば、芥川氏にも氣の毒な事は勿論、又反撥する側から云つても、反撥のしツばなしで、直ちにその對象を振向きもしないやうではその人自身餘り呑氣過ぎやしまいか。趣味好悪は暫く措き、私は、さういふ生きかたの人に敬意を持つ事が出来ない。

恐らく斯う云へば、いつか私が芥川氏に反撥したことも想像がつくと思ふ。事實、私は嘗つて彼に反撥した。が、私はそれを壓へた。さうして彼を見た。……と云つて私は敢然、芥川龍之介を斯く見るべきだ、と人に云ひ得る程の自信も無い。謂はゞ、まア芥川氏を斯う見る人間もゐるといふ位の所で、それが果して妥當であるか否かは、自ら公平なる讀者の見解に俟つの外は無いのである。

一、彼は才人以上である

さて、……芥川氏は才人ださうである。ださうであると云ふのは、私の見る所が些か世間のそれと違ふらしいからだ。芥川氏は才人であるに違ひない。が、多くの人は、それを誤解してはゐないか。早い話が、彼は座談などでもよく皮肉や警句を吐く。而も多くの人は、それをよく受入れると否とを問はず、未だ正當に理解してゐないやうである。例へば、彼の作『秋』を見ると、俊吉といふ人物が「冷笑と諧謔との二つの武器を宮本武藏のやうに使つてゐた」といふ文句に出會すが、恰度あれである。人は謂はゞ、彼の才氣を「宮本武藏が使ふ武器」のやうに、否中には、その「武器」ほどにも價値を認めない、と云ふよりも、全然彼の才氣を單なる彼の頭腦乃至小手先だけのものと見る人が多い。

が、恐らくそれは誤りである。私から見れば、芥川氏の才氣の如きは、彼の本質に根差す、もつと根本的のものだと思ふ。謂ふならば、彼の透徹した觀照、都會人の持つ敏感等が、その本來の聰明と結び附いて生れるものだと思ふ。而して、それは中々得難く、且つ珍重さるべき類ひのものだとさへ思ふ。かの偶々、人をして反撥せしむ

るが如き彼の皮肉や警句に至つては、謂はば彼の稚氣より來る。その場の惡戯氣に過ぎぬことは餘りに明瞭である。何故人は、二六時中ムキになつてゐなければならぬのか！ 反撥する方こそ無理と云はねばならぬ。

一體に最近我が文壇は、露西亞文學に影響される所、甚だ多かつた。従つてそれが惡影響を齎した事も亦少くは無い。かの無暗に「眞面目」を歓迎するのなぞも、その一つであらう。「眞面目」がいゝもので、「不眞面目」なのは悪いといふだけの事なら文句は無い譯であるが、さうした觀念はやがて延長され、穿き違へられて、表面の「眞面目」らしさのみを問題とするに到つては論外である。強がつて見たり、敬虔らしく装つたり、又非常に深酷さうな容子をしたり、……餘りにマヤカシものゝ多過ぎる現代である。何事にあれ、正面から押す事のみが尊ばれて、少しでも變つてゐると、變つてゐる事だけで攻撃されさうな現代である。宇野浩二氏の如きも頭から巫山戯てゐるものと反感を持たれる（尤も私の同氏に嫌厭たる所以は別に在る）現代である。更に又、嘗つて雜誌新潮が主流傍流に對する諸家の意見を徴してみると、二三流どころの拙

い作家のみを主流だと主張する批評家が現はれる現代である。

既に斯くの如く出鱈目な現代である以上、芥川氏の如きが誤られるのは、蓋し當然なのかも知れない。彼等に從へば、芥川氏の藝術は主流で無いと云ふであらう。小手先の才氣だけのものと貶すであらう。而して中には、芥川と云ふ名を聞いただけで、その敬虔らしい顔を睨めて首を左右に振るやうな人さへるさうに思はれる。然し、……私はこの「然し」を述べる前に、以下芥川氏の作「きりしとほろ上人傳」に就いて語るの便宜を宥して頂きたい。

二、「きりしとほろ上人傳」その他

『きりしとほろ上人傳』は常に私の愛讀する作品である。愛讀と云ふよりも、愛誦と云つた方が、より私の心持に近い。それは洵に優しい、氣持のいゝ物語である。――

昔、シリアの山奥にレプロボスといふ山男がゐた。彼は大男で、力も何人力といふ位強く、その頭の髪の中には四十雀が何羽と無く巢喰ふてゐたが、性來心根の優しい

彼は、決して人に害を加へたりしないばかりか、よく獵夫などを助けて獸を取つてやつたりした。間も無く彼は大名になりたいと思つて、天下で一番強い王様に仕へて功名を立てた。そして思ひ通り大名に取立てられたが、戦捷祝宴の席で王様が悪魔に祈りを捧げてゐるのを見ると、彼は世界には王様よりもまだえらい悪魔のあることを知つて、恰かも欺されたかのやうに憤る。そこで王様は彼を謀叛人として牢屋に入れたが、レプロボスは悪魔に救はれ、その弟子となり、悪魔と共に遠くエジプトの空へ舞ひ上る。悪魔はやがて砂漠の中の或る一軒家に舞ひ下りて、其處の隠者を誘惑しようとした。が、悪魔は失敗した。隠者は朝になつて、その戸口に大男を見出した。大男が云ふには、世界では悪魔が一番強いと聞いてゐるが、その悪魔もあなたには負けた、だからあなたこそ一番強い人に違ひない、どうか私をあなたの弟子にして下さい、と頼み込んだ。

隠者もそれには困つたが、やがて「おのれ人に篤ければ、天主も亦おのれに篤からう理」を説いて、遂に彼に流沙川の渡し守になれと教へた。レプロボスはそこで隠者

から御水を授けて貰ふことになつた。すると不思議にも嘗つて彼が山を下つて王様に仕へようとした時、髪から飛び去つたあの四十雀の群が、折から日輪の爛々と輝いた中から、彼の叢ほどな頭へ舞ひ下つた。

レプロボスは又、名もキリシトホロと更められ、いよ／＼流沙河の渡し守になつた。そして、その後三年間風雨も厭はず渡し守をしてゐたが、嘗つて隠者が云つた御主の姿は一度も見えなかつた。或る風雨の烈しい真夜中、いたいけな聲がして子供が一人、川を渡して呉れと頼んだ。キリシトホロは不審に思つたけれども、直ぐに子供を肩へ載せて雨の中を川を渡りはじめた。ところが、初めはそれほどでも無かつたものが、次第に川の中程まで来ると、肩が重くなつた。彼は懸命に堪へた。そして最早や一步も前に踏み出せなくなつた時、不思議にもこの雨の中に例の聞き慣れた四十雀の聲がしたと思ふと、肩の子供の頭には三日月ほどの金光が輝いてゐた。キリシトホロは急に力が出て向ふ岸へ辿り着いた。そして、その子供といふのは實は天主だつた。……

これが『きりしとほろ上人傳』一篇の梗概である。其處に盛られた作者の思想は哲

く描き、これ位の完成を持つた作品は、作者の作中でも稀らしい。殊に、この豊富な空想と、構圖の妙味に至つてはどうであらう。これが凡庸の手に成つた作品であらうか。否この空想が、この構圖が、これが單なる頭腦や、小手先きの才氣と云へるであらうか。どうしてこの才氣を（この作品が才氣のみによつて作られてゐない事は無論である。それに就いては以下説く所を参照して頂きたい）作者の人間から切り離して考へる事が出来よう！

嘗に『きりしとほろ上人傳』のみでは無い。又『奉教人の死』の、例へばあの作の筋の展開の仕方を見ても、それは十分わかる事である。——奉教人達が拾つた美少年は信心が篤いので伴天連も彼を愛してゐたところが、此頃になつて信者である村の傘張の娘との浮名が立つた。しかし、初めは誰もその噂を本當にしなかつたが、噂はますます／＼高くなり、遂に娘が孕みその親は寺院へ怒りに來たので、今は疑ふ餘地も無くその美少年は寺院から放逐された。讀者は此處まで読んで來て、作中の人々同様、何の疑ひも無くその美少年が娘と通じてゐた、と思ひ込むに違ひない。ところが、……

ところが、寺院を放逐された美少年は、何の云ひ譯をするでもなく、世間からは耶蘇教徒だといふので迫害を受け、乞食同様な暮しをしながらも勤行を怠らなかつた。或る時、長崎に大火事があつて、かの傘張の家も焼けた。その家は父親も娘も逃れたが、嬰兒がまだ火中にゐる。しかし火が烈しいので救ひにも行けない。その時である、かの美少年が何處から現はれたのか、いきなり火中に飛び込んで、嬰兒を救ひ出す。が、恰度その時美少年は焼け落ちた梁の下敷きになつた。そして、嬰兒は彼の手から人々の方へ投げ出されたので、危ふく助かつた。人々は彼が嬰兒を救つたのを流石親子の情だと云ひ合つた。……此處へ來ると讀者は一層、美少年が娘と關係があつた、その嬰兒は彼の子だ、と思ひ込む。ところが、……

ところが、その時唐突に傘張の娘が伴天連の前へ出て、泣きながら懺悔したのでは、あの嬰兒は美少年の子では無い、私は彼に幾度と無く云ひ寄つたが、何時も素氣無くされるので、遂に腹癩せに自分から關係があるやうに云ひ囁らしたのだ、嬰兒は實は隣家の男との間に出来た子だ、と云つた。恰度その時、今にも息を引取らうとし

てゐたかの美少年の焼けた胸からは、ふくよかな女の乳房が表はれてゐた。——といふのだ。

何と云ふ筋の展開の仕方であらう！ 奇想天外より落つとは正に此事では無からうか。作者は讀者に、散々いろんな理由から、かの美少年が娘と通じてゐたやうに思ひ込ませた揚句、終りへ行つてコロリ寝返りを打つて、「さうでもない」と本當の所を明す。讀者は其處で稍呆氣に取られてゐると、もう一つ加之に、美少年は實は女なのだ、と底を割る。洵に端倪すべからざる展開の仕方では無いか。而もそれが少しも不自然で無いのみならず、その點非常に巧く行つてゐる。而して亦この作に於ても、芥川氏が才氣縦横、到底凡庸の作家で無い事を證據立てるばかりで無く、それが小手先き乃至頭腦だけのもので無い事にも氣附くのである。否此等の二作のみでは無い。當時批評家からよく云はれなかつた『南京の基督』の如きも、私はかなりいゝ作として認めると共に、この場合の適例として上げべきものだと思ふ。

が、或は斯くの如き事は、芥川氏に於て大して重要な點では無いかも知れぬ。私は

更に彼の他の特質に就いて語らねばならぬ。

三、英雄人を救くの願か

既に、芥川氏の才人以上である事を認める人はあつても、彼がセンチメンタルな情の人間である事を知る人に至つては殆んど稀である。否、それどころか甚だしきは往々彼を以て人間味の無い男、人間的な感情の漏ひが無い男、なぞと云ふのみならず、それを以て彼を難する好題目にしてゐるのだから、不思議だ。

元來芥川氏は、その本來に於てセンチメンタリストなのだ、——と云へば、唐突に聞えるかも知れぬ。が、それが實際なのだから、仕方が無い。では、その本來に於てセンチメンタリストの彼が、一見何故さうで無いやうに見えるか、と云へば、第一には彼が極端にその性癖を嫌ふ所から來てゐる。而して、第二には飽迄理智的に己を支配しようとする所から來る。畢竟、センチメントの涙によつて理智の眼を曇らされる時、彼自身、己が何かルーズにでもなるやうな氣がするのに違ひない。又一面、世間

的な第二義的な必要から來てゐるのかも知れぬ。……兎に角彼は、さうした理由から、センチメントを除いて、理智的にならうとした。而も彼の努力はそれを成し遂げさせたかの觀がある。

その邊の消息は、矢張り芥川氏の人間に接して見ると、よく分るやうである。三人以上同座した場合には、ホラテユースの所謂「一の機智を失はんより寧ろ一人の友を失はん」とも云ふべき趣きを示す彼(何故彼がさうなるか、分る人には分ると思ふ。そしてそれが分る人は強ちさうした彼を責めないであらう。)ではあるが、一旦それが二人きりになれば、打つて變つてしみぐと話し込む。而して友人にも中々思ひ遣りのある方である。

それは對人關係の場合のみでは無い。人は何故、彼の作品から彼の情味を見ようとはしないか？『きりしとほろ上人傳』を見給へ。『蜜柑』を見給へ。又、最近好評であつた『トロッコ』を見給へ。此等の作品が吾々を動かす所以のものは何か。畢竟悉くそれは、作者のセンチメンタリズムでは無かつたか！『きりしとほろ上人傳』に流れ

るあの何とも云ひやうの無い優しい氣持、『蜜柑』のあの主人公の感動、而して『トロッコ』に描かれた少年とその少年を懐しんでゐる作者の氣持、——悉く之れ、作者芥川氏の人間にあるセンチメンタリズムの流露で無いものは無い。謂はゞ、作者は泣き面を見せない迄の事であらう。英雄人を欺くの類か、その點世間は餘りに甘く芥川氏に欺かれたとも云へよう。

が、英雄芥川氏は斯く「人を欺く」事には成功したけれども、否それは必ずしも、「成功」では無かつたかも知れない。……彼の作に『或日の大石内蔵之助』といふのがある。その中で、内蔵之助が皆の話してゐる題目を嫌つて、話題の轉換を試みる所がある。そこで會話は「彼の意圖通り方向を轉換したが、その轉換した方向が、果して内蔵之助にとつて、愉快なものだつたかどうかは、自ら又別な問題である」そして話題は又別な内蔵之助にとつて不愉快な方向へ進んだ、といふ所がある。恰度、その内蔵之助の心理が芥川氏の場合に似てはゐまいか。芥川氏はセンチメンタリズムを捨て、理智に就いた。而して世間からは「彼の意圖通り」理智的な人間と思はれたけれ

ども、さて「その方向が、果して内蔵之助（芥川氏）にとつて、愉快なものだつたかどうか」。芥川氏は其處に、己を人間味が無いなどと亂暴な事を云ふ「新しい事實（世間）を發見」しなければならなかつた。

果してその「新しい事實」は、芥川氏にとつて「愉快なものだつたかどうかは」別として、然うだ、確かにそれは亂暴な言ひ草には違ひない。芥川氏は實際は情の人だつたのである。それに今や彼も人の親である。彼の感想集『點心』中「お降り」の一項を見ても、彼がしみじみとした情の人である事がよく親はれると思ふ。

四、彼は竟に詩人であつた

芥川氏のセンチメンタリズムを認める人が少ない以上に、彼が詩人である事を知る人に至つては、最早や皆無と云つていゝ。否、芥川氏を詩人だなどと云へば、中には頭から嗤つてしまふ人がゐないにも限らぬ。それ程彼は、詩の分子など持ち合せない人間に見られてゐる。

が、その實芥川氏は中々詩人なのだ。では、彼は如何なる詩人であるか。固よりセントイメンタリズムを嫌ふ彼は、生田春月氏の如き抒情詩人ではない。又、追懐的な氣持を樂しむより寧ろ壯心に燃えてゐる彼は、佐藤春夫氏の如き愛戀の詩情にも他人である。否、本當を云ふと彼も多分にさうした詩情を持つてゐる方なのである。然し、彼はその底の詩を自身好まないらしい。従つて、よしそんな詩情を持つてゐようとも、彼はそれを捨てるか、或ひは又強いて蔽ひ隠すか、兎に角それを表はさない事は事實である。

では、彼は如何なる詩人であるか。……芥川氏はよく夢の話をする。こんな夢を見た、あんな夢を見たなどと、時々私は、彼から夢物語を聞かされる。ところが不思議な事には、その夢に大抵花が出て来る。「誰々が薔薇の前に立つてゐた」とか、「菊の花が、それが白いやつでね、一面に咲いてゐるんだ」とか、私は屢々出て来る彼の花の話に、今更人間にだけしか興味の向かない私自身を顧みて、彼が中々詩人である事を感じさせられる。さう云へば夢の話だけでは無い。彼の小説のどれを見ても、屹度

一つや二つは花が出て来る事を讀者は氣づかれるに違ひない。又、「百日紅」と題する感想の一項では、いろんな草花に就いて、よくそれを觀察した人で無ければ、而して興味を持つ人で無ければ、氣のつかぬことを語つてゐるではないか。

更に又、誤つて世間から人間味がないと云はれる彼の小説に就いて見る。彼はよく昔物を扱ふ。歴史小説とは稍趣きを異にするあの昔小説は、嘗つて或る人から、芥川氏は昔を描いてもその中の人物は現代だ、とか非難された。成程その非難は中つてゐた。彼の昔小説に出て来る人物は、現在其處らにもゐさうな人物である。が、あの「時代」はどうであらう、私は成程人物は「現代」かも知れぬが、「時代」は「時代」としてはつきり出てゐると思ふ。例へば初期の作『羅生門』にしても、作品としては無理があつて私もこれを大して佳作とするに躊躇するものだが、確かにあれには平安朝の「時代」の空氣が出てゐる。又、『鼻』『運』更に最近の『六の宮の姫』にしても、すべて「時代」ははつきり浮び上つてゐる。而して『奉教人の死』『きりしとほろ上人傳』の二篇にはあの當時の「時代」が、又『開化の殺人』の如き私の好まぬ作にも「時代」

と云ふ點では何だか明治十年頃の「時代」は斯くもあらんと想像される。その他終始一貫、芥川氏の作品は悉くそれらの「時代」の空氣が髣髴されてゐないものは無い。芥川氏の小説は、「時代」を表はし得たのみならず、又、よく見ると他の作家の歴史小説とは、かなり趣きを異にする所がありはしまいか。と云つて、巧い拙いを云ふのは無い。謂はゞ、芥川氏のもものは、それらの「時代」へ息吹が掛つてゐるやうな所が無い。語を換へて云へば、昔の「時代」を懐しみ憧れる氣持が流れてはゐるまいか。畢竟私は、その「時代」が作者にとつて寧ろ「現代」よりも一層美を感じさせる爲めでは無いか、と思ふ。私をして牽強附會の言を成するのと思ふ者に恥あれ！ 實際私はさう思ふのである。

試みに讀者よ、謙虛な心もて彼の昔小説を味ひ給へ。それは決して理智一遍のものでも無ければ、又才氣だけのものでも無い。若し其處に不満を感じさせるものありとすれば、それは表現の或る固さであらう。が、讀者はそれに堪へなければならぬ。されば其處には、少しく誇張して云へば「古へを偲び咽ぶ」作者の心を見出すであらうか

ら。……「古へを偲び咽ぶ」心！ 然うだ。芥川氏自身も「昔」と題する感想の一項で、何故「昔」を描くのかと問はれて、「異常なる事件なるものは、異常なだけそれだけ、今日この日本に起つた事としては書きこなし悪い。もし強いて書けば、多くの場合不自然な感を讀者に起させ」るからと云ひ、又「さう云ふ必要以外に昔其ものの美しさが可成影響を與へてゐる」ことも語つてゐる。

私はこの上、芥川氏の詩人である事を立證する爲に、彼の芭蕉や一茶に對する一家見を紹介して、私自身の短見を暴露するまでの必要を感じない。従つて又、彼の南畫に對する見識ある鑑賞眼を紹介しようとしてもしない。唯一事、彼は嘗つて或る婦人雜誌から、女を如何なる點から好むかと問はれて「ほの／＼とさせる點で」とか答へたさうである。私はそれを聞いた時、如何にも彼らしい、彼の詩情を適確に云ひ表はした言葉だ、と深く感じたことを云ひたい。

猶彼は「不朽」と云ふ感想の一項で、文章論をした中で、彼自身メリメに私淑するかの如き口吻を洩してゐる。が、彼はメリメでは無い。メリメにはなれさうも無い。

メリメには西洋人でなくては見られないやうな冷酷さ、獐猛さ、極言すれば或る野蕃ささへある。東洋人の彼にはそれが無い。が、それが無い代りには、彼には東洋人特有の詩情がある。最近の傑作『庭』を見給へ。庭を表面に描いて人物や事件を裏にしたあの手法の成功は云はずもがな、一字一句を苟もしないあの簡素な南畫(?)を見給へ。作中人物の如き、一人に就いて凡そ一言か二言の言葉だけで、それで或る程度までそれくゝの性格を髣髴し得たあの効果を見給へ！我が芥川氏は竟に東洋詩人であつた。

五、表現——完成——冒險

私は前章に於て、芥川氏の小説にある表現の固さと云ふ事を一言した。事實、彼の小説の表現には、多くの場合一種固い感じが附き纏つてゐる。而してそれは、世の批評家をして、往々彼を誤らせる基となつてゐるものである。

私は態と「技巧」といふ語を避けて、「表現」と云ひたい。技巧といふ言葉が誤られ

易いからである。「表現」を云ふとなれば、それは必然文章に就いて語る事になる。芥川氏は名作家として聞えてゐる。實際彼の文章は、今更私が贅する迄も無く、一字一句も苟もせざる、隙の無い、一種精緻なる名文である。而も精緻ではあつても、毫も型に倣つてはゐない。ゆみならず又、その云ひ廻しに至つては頗る自由自在である。それは里見弴氏の文章が自由だと云ふ意味とは違つて、自由なのだ。大抵の人には、その人に決つた云ひ廻しと云ふものがある。が、芥川氏にはそれが無い。凡そ如何なる人の云ひ廻しでも、總べて彼の中に含まれてゐない型は無い、と云つても恐らく差支へ無いと思はれる位、多岐多端自由自在、その點想像もつかぬばかりの苦心と用意とが拂はれてゐるのが彼の文章であらう。

彼は又、嚮に擧げた「不朽」と云ふ感想の中で文章の苦心の程を示して、彼自身は華麗なる文體を嫌つて、簡潔なるそれを希望してゐる。又、尤もな意見だと思ふ。が意見は尤もであるが、その點彼は未だ實際に於ては、その心掛けを満し得てゐないので無いかと疑はれる。固より彼の文體は冗漫では無い。否より寧ろ簡潔に近い。然し

簡潔は簡潔であるが、未だ華麗な氣味がないでは無い。以前、支那を扱つた『南京の基督』『秋山圖』など、その點作者の意に背くものでは無いかと思ふ。

が、大體に於て、芥川氏が華を去り簡に就かうとする心掛けは窺ふに難くない。而して晉に文體の簡潔を心掛けるのみならず、彼は爾が上にも作品の「完成」を氣にする。彼の作は悉く、作品の纏まりが最も注意せられてゐる。而もその意味に於ては作品を完全に支配し切つてゐる事、彼如き作家は稀であらう。恰かもそれは、作品の「完成」は先づ措き、飽迄深く突込む事を以て第一と心掛ける里見弴氏と、その行き方に於て好對照を成すものと見られる。畢竟、彼の作品が一種或る固さを感じさせるものさうした理由に基くのではあるまいか。餘りに精緻に過ぎる文章、餘りに纏まり過ぎる表現、其處から來る或る窮屈な感じではあるまいか。かの人間味が無いとか、人間的な感情の濕ひが無いとかいふ非難は、強ち根據の無い譯でも無く、實はその「表現」の固い感じを、大雜把に然ういつたのでは無からうかと思ふ。

私は又、一面詮索を逞しくして、彼の「完成」は時にその作品に妨げを成すもので

は無いかと恐れてゐる。作者は餘り「完成」を心掛ける所から、彼自身その裡にある出るべきものも出さないで終るやうな事は無いであらうか。蓋しそれは想像に難くない事である。

試みに今之れを『秋』に就いて見れば、成程この作品はこれだけのものとして申分無く「完成」もされてをれば、又佳作とするに躊躇もしないけれども、愆を云へば、作者はまだ突込むべき所をも態と控へたらしく思はれる點で、些か私には不満である。尤も作者は、この作に於ては心理的に剔抉する方法を探らずに、出来るだけ暗示的に描かうとしたらしい。従つて例へば、あの自分の戀人を妹に譲つた姉が久し振で上京して、夜、今は妹の夫である以前の戀人と庭を黙つて歩く邊など、恐らく作者のこの意圖が十分の効果を上げた箇所であらう。而してこの作品はその意圖通りには成功したものと云つていい。と、斯う云つて來ると、私の所謂不満と云ふのが分らなくなつてしまふが、謂はゞそれだけに私は不満なのだ、と云ふより仕方が無い。詰りあれ以上突込めば、あの『秋』と云ふ全體の調子が破れて來るかも知れないとは思ひなが

らも、……然うだ、私は更に別な方から之れを云はう。

唐突な事を云ふやうではあるが、私は芥川氏と會つて面白く思ふのは、彼の顔である。時によつて色々に変るあの顔である。或る時は澄み渡つた秋の朝の感じ、又或る時は、子供みtainな無邪氣さも見られる。ところが、どうかすると——大抵それは稍疲れた時らしい——あの顔の眼から頬へかけて、非常に病的な感じを見出す事がある。それは一種不氣味な感があると云つても必ずしも誇張では無い。その點、例へば久米正雄氏の、如何に憂鬱が漂つてはるても飽迄健全な顔と較べれば、蓋し思ひ半ばに過ぎるものがある。

既に表てに病的な感じを漂はせてゐる彼は、その裡にもそれが無ければならぬ。彼はよく凄氣と云ふ事に就いて語る。私は彼ほどそれを口にする人を見た事が無い。口にするばかりで無く、例へば池西言水の俳句の凄氣を認めたのは彼である。又、作者自身は餘り好まないらしい『奇怪なる再會』にも凄氣が出てゐる。この作は新聞の續き物として書かれた爲めに、其處に幾らか續き物の約束に縛られた點は見逃せないが、最

初二三章の或るルーズな感じから、次第に陰氣な空氣に變り、引續いて凄いなと思ふと忽ち、それに引入られて有無を云ふ餘裕も無く最後まで連れて行かれる。鳥渡讀者は、凄さのために作品の出來榮を忘れてゐる位である。

斯く見來つて私は、卒直に、彼が「完成」のみを心掛けるのに強ち賛成し得ない、と云つてしまはうか。例へば、私が今云つた病的な特質の如きも、作者はもつと大膽に表はしてはどうだらう？ 多少「完成」と云ふ點に難はあつても、それは一時の事だ、もつと勇敢に突込んではどうだらう？ 尤も聰明な芥川氏の事である。よくそれに氣づいてゐられる事も、私は知つてゐるのだ。いや、何んのかのと云つて見るもの、蓋し藝術上の冒険は最も難問題、難事業に屬する。

六、結語

私は如上、屢々芥川氏の感想を引用した。それは他でも無い、彼の近著感想集『點心』の中から抜いたのである。私は此頃、この『點心』と共に、佐藤春夫氏の感想集『藝

術家の喜び』をも併せ読む機会を得た。すると、読みながらいつか私は、この兩者を比べて見るやうな心持になつてゐた。

『點心』も『藝術家の喜び』も、共に如何にも藝術家らしい感想集である點では變りが無い。藝術に没し切つてゐるといふ點では、他に鳥渡比を見ない位で、恐らくその意味に於てこの兩著者は藝術主義者と云つていい。が、素質に至つて云ふまでも無く、各々異つてゐる。その最も大きな特色は、前者は動もすると久米氏の所謂「術學がしたくて堪らない」趣きの見える中に、嚮にこの著者が女に就いて云つた所謂「ほのく」たる詩藻を蓄へてゐる點であらう。而して後者はと云へば、それは佐藤氏のあの「詩」の表はれが濃い。更に又、深切な讀者なら、前者の中に尋常一様で無い藝術家の心掛け、苦心の氣持を読み取るであらう。而もその氣持が、更に尋常ならざる壯心に満ちてゐる事に氣づくに違ひない。而して後者はと云へば、その點何處か己の「詩」を楽しみ、それに安心してゐる氣持が見えやしないかと思ふ。……いや、然しこんな比較印象は結局どうでもいゝ事なのだ。茲では、兩者の比較が重要な問題では無くて、偶々

それらを並べ語る事によつて、前者芥川氏の「生きかた」をより明瞭させる便宜としたりに過ぎない。

恐らく芥川氏には、未だ私の見得ない長所があるかも知れないと同じく、又私の見得ない短所もあるかも知れない。が、然う云ふ意味では、私は十分彼に信用もし、安心もしてよからうと思つてゐる。彼が負けず嫌ひである事は、屢々菊池寛氏の云ふ所である。又、芥川氏自身も嘗つて「僕に若し長所があるとすれば、それは、僕の轉んでもたゞは起きぬ性質だらう」と云つた。全く彼は藝術上に於て緊張した「生きかた」をしてゐるのみならず、又實生活の方でも、出来るだけ無駄の無い「生きかた」をしようとしてゐる。その點彼は、必要不必要の限界を明確に心得てゐる男である。而して一意、その必要の「生きかた」に邁進しようとする人である。既に彼には、如上私の述べた豊富なる天分があつた。而も「生きかた」は斯く如くである。何の不足があらう！ 正に彼は祝福さるべく、又稱讃さるべきでは無いか！

恐らく芥川氏は行詰る事を知らない人であらう。否、彼は屢々行詰つて、屢々悟る

人であらう。彼は元來都會人であつた。従つて彼には、都會人通有の或る危険なる「生きかた」に墮す愛へがあるべきだつた。が、彼は疾くそれに氣づいて、自身その點を警戒した。而して今日の斯うした「生きかた」を樹てたのでは無かつたか！

芥川氏は常に小説に於て、新しくなく、と云つて勿論古くもない、「不易」の境地を心掛けてゐる。然り、彼の數年來の名聲の如きも亦、今や流行の域を超えて、定評と成りつゝある！ 小論「芥川龍之介稱讚」、「稱讚」反つて芥川氏を傷けた事多い。謝して筆を擱く。」

(十一年八月)

講談の面白味

—圓玉と芦洲—

圓玉と芦洲、と云つた所で、圓玉や芦洲の提灯を持つのではない。僕はまだそれほど講談通ではない。

と云ふより寧ろ僕は、以前には、講談なんかと高を括つてゐた方である。それである、高を括りながら、毎日々飯後など夕刊をひろげると、つひ簡単な面白味で、一つには食後あの短いものはトツつき易くもあるもので、大抵一つは缺かさず讀んでゐた。が、心では矢張り世の諸君子の如く、あの鳥渡見ると型に嵌つた筋に反感して、講談なんか莫迦らしい位に輕蔑するの矛盾を冒してゐたのは事實である。

しかし、その後、講談も莫迦にならぬと思ひ出した。下手な小説家よりも技巧など

餘程巧いと思つた。幡隨院長兵衛がどうしたとか、云つてると思ふと、急轉直下、話は現代の政界に及んで十數行。と又、忽ち長兵衛の往時に話を戻したり——いや、これア中々才氣も要れば、修業も要る。どうして（！）型に嵌つてゐるところか、あの元來が型に嵌つたものを銘々の演者がそれ／＼生かしてもゐれば、また演者の個性も出てゐる。無論高等な藝術とは云へなからうが、まアその中へ加へても差支へあるまい、などと考へたのである。

そんなわけで此頃では、先づ僕も講談の愛讀者と云はれても大して不服は持出せない。今「愛讀」してゐるのは、悟道軒圓玉と小金井芦洲の二人のものであるが、この二人を毎日讀んでゐると、いつか僕はその比較をやつてゐた。——今、それを少し書く。

悟道軒圓玉の特色の第一は、矢張りあのすつかり老熟した話し振りでもあらうか。讀んでゐても、圓玉その人がもうかなりな年だらうと想像される點である。悠々と落着いて話を進めて行く具合は、實にヤス／＼と、又迫らぬところがあり、滋味さへ感

じられる。又、機智や皮肉を縦横に使ひながら、それが、しつくり嵌つてゐて柔かなのも、年だらうと思はれる。たゞ稍下司でないでもないが、それも上司小劍の小説から見れば我慢出来る程度のものである。

それに比べて小金井芦洲は、少しも下司でない代りには、何處か堅苦しい感じがあつる。無論圓玉よりは年も若いのだらうと思ふ。が、それだけに又この人の話し振りに熱がある。一生懸命である。殊に立廻りや押問答の場面になると、一際冴えて來て僕なども思はずハラ／＼させられることが毎度である。その邊の技巧は鳥渡今の小説家の中でもさうザラには見當らない、と云つても恐らく過言ではない。

講談は今のところ、この二人しか僕は見てゐないから、他の人のことは何とも云へぬ。

齒がゆくなつて

宮島新三郎君が此間の時事新報で文壇の現状を論じてゐた。それで見ると、宮島君は今の文壇に對して不満を持つてゐるらしいが、それは洵に尤もである。實際宮島君も云ふ如く、文壇は今行詰つてゐる。何んとなく調子が低い。しかし、では何故さうなのか。又如何にして、その沈滞を救ふべきか。といふ段になると、宮島君の筆は頗る鈍くなつてゐる。同君は、自然主義の時代には作家は今よりもずつと一生懸命で、眞面目に考へるべきことを考へた、とか云つてゐるが、成程さうかも知れない。そして又、現在の作家がその割に技巧には努力しても、根本に呑氣な生活をしてゐる、とも云つてゐるが、まアそんな非難も云へるかも知れない。

が、僕の云ひたいのは、宮島君がさて、さういふ非難をして何になるか、といふこ

とだ。過去は斯うだつたが、今は詰らない、などとそんなことを云つてみて、それが何になるかといふことだ。全く所謂評論家は、斯うした云ひかたをよく云ひたがるが、しかしそれが尤もな云ひ分であればあるだけ、それは無意義な言葉だと思ふ。

若し假りに宮島君のその意見が、他の人の見るところと全然異つてゐるものならば、或ひはその方が却つて何等かの意義が見出されるかも知れない。そして又、よしその意見が他人の見るところと等しくはあつても、其處に宮島君一個獨自の解釋があるなら、無論それでも結構なわけである。が、遺憾ながら宮島君のはそのどちらでもない。およそ宮島君に他人と異つた意見などを求めることは、これ位無理な話は世の中にあるまいし、又同君一個の解釋を求めようとするのも、それと同じやうにむづかしいと思はねばならぬ。同君は、單に文壇が行詰つてゐるとか、自然主義の時代と比べてどうだとか、そんなことを述べてゐるだけである。そして、その沈滞した文壇を打開する方法として、世の作家に「もつと現實を見つめよ」と説いてゐる。現實を見つめよ！宮島君はさう云つてゐるだけだ。さうして、その言葉の續きに、イブセンとヨハンボ

「ヤーを比べて、イブセンを社会的と云へるならボーヤーは世界的だらう、などと云つてゐるが、實際何んとでも云ひようのあるものだ。

現實を見つめよ！ まことに尤もらしい結構な言葉ではある。が、それを單にさう云つただけで何になるか。誰だつて現實を見ようとしてゐる筈だ。恐らく自分から現實に脊を向けようと考へてゐる人は、まアなからうと思ふ。そんな人達に「現實を見つめよ」などと云つて、それが何になるか。餘りに意義の無さ過ぎる言葉ではないか。そんな言葉で、作家に何の益するところの無いことは勿論、一體誰にどんな暗示を與へ得ないことも分りきつた話ではないか。

現實を見つめよ、と云ふことだけなら、誰だつて知つてゐる。それは昔から幼稚な批評家の最後に持ち出す體のいゝ無意味な言葉ではなかつたか。肝腎なのは、そのもう一つ先きである。そのもう一つ先きまで云つてこそ、初めて意義もあるといふものである。

數年前、僕は宮島君を攻撃したことがある。が、その時も今も、僕の同君に對する

意見は相變らずである。彼は、是れ依然として吳下の舊阿蒙だ。嘗つては同君の評論を読んで餘りの無能さに呆れてしまつて、塞がらなかつた僕の口も、それも毎度のことになつてもう此頃では開きもしない。が、その代りに、だんく彼が哀れになり、情けなくも思ふやうになつた。今云つた同君の論にしても、題こそは「文壇の様相を論ず」とか何んとか、如何にも堂々たるものであるが、さて何が「様相」やら「論ず」やら、今更その下らなさ加減を羊頭狗肉なんて云つてムキになる氣もしないけれども、だが、こんな男がゐるからこそ批評壇も振はないのだ、こんな男がゐるからこそ作家が批評家を馬鹿にするのだ、と考へると、全く厭やになつてしまふではないか。別段やつけたくもないのだが、傍で見てるアンマリ齒がゆいので鳥渡云つてみたまでである。

愚痴が小説になつた「剪られた花」

はじめ「その日暮しをする人」として中央公論に出たときも、また「剪られた花の一節」として新小説に出たときも、それぞれわたしはその月に月評を書いたので、云ひたいことは大抵云つたやうに思ふが、さて今嘗つてきれぐだつたものが一冊に纏められたのを見ると、改めて云ふべきこともかなりにある。最初、作の前半だけを雜誌で讀んだとき抱いた疑ひは、今もなほある。わたしは主としてそれについて、即ち作者のこの作に對する態度に就いて云はうと思ふ。

或る評家の言によれば、佐藤春夫氏は百年に一人しか出ない詩人ださうだが、その持ち上げかたの大袈裟なものも可笑しいけれど、まア別にわたしはそれに異議を挟むまい。いや異議を挟むどころか、なかくわたしも佐藤氏に敬服してゐる方なのだ。も

つとも敬服してゐるとは云つても、それは彼が「百年に一人しか出ない詩人」だからではない。わたしは佐藤氏が「百年に一人しか出ない詩人」であるか、それとも十年、三年に一人位づゝ出る詩人であるか、そんなことは考へてみたことがない。否それのみならず、彼が詩人であることは、たしかに彼にとつて他の作家とは違ふ一特質ではあらうけれど、而もわたしは、詩人故になら大して佐藤氏に敬服しないであらう。謂ふならばわたしは、彼が詩人でありながらそれでて、例へば彼の傾向以外のまるで正反對のものにでも理解を持つ、その聰明さをも併せ具ふる彼に敬服してゐるのである。

實際佐藤氏は聰明であつた。全く、その聰明故にこそ彼は小説家なのではあるまいか。その聰明故にこそ彼は詩人としてだけでは満足出来なかつたのではあるまいか。——と云ふと、語弊があるかも知れぬ。餘り詩人を馬鹿にした言葉かも知れぬ。が、早い話が、例へばたゞ泣いてゐるだけでも詩人にはなれるが、小説家はそれだけでは困ると思ふ。センチメンタリズムを全然除いた小説といふものがわれ／＼に想像出

來ぬとしても、なほ且つ小説にはセンチメンタリズム以外に必要なものがあると思ふ。では、その必要なものとは何かと云へば、無論いろんなものがあるだらう。が、今それを假りに理智と云つて置かう。

詩人は泣いてゐるだけでもいい。が、小説家は泣いてゐるだけでは、小説家ではない。彼は泣くと同時に、何故己れが泣くのか、といふことについても考へるものでなければならぬ。さういふ意味に於て、佐藤氏は詩人であると同時に、又小説家でもあつた。而も彼は人一倍涙多い詩人である上に、又人一倍聰明な小説家でもあつた。

さて、わたしは「剪られた花」について云はねばならぬ。この作は、嘗つて人妻と戀に陥つた主人公「私」が、その淡かつた戀を追懐する傍ら、彼自身の生活をとりとめもなく描いたものである。とりとめもなく——洵に作者はとりとめもなく、さまざまな事柄について語りながら、而も一種頭のよさに依つて、巧みにその悉ゆるとりとめもない事柄を、主題である戀の追懐にすつかり結びつけてゐる。之でも小説か？ 事によると或る讀者はさう疑はないにも限るまいと思はれるほど、それほどこの作は一

見支離滅裂である。嘗つてこの作者に、當時名文の噂高かつた「私の生活」と題する謀文があつたが、わたしはふと今それを思ひ出した。そしてこの作も何處か雜文の延長みたいな氣がした。が、その癖それが極めて藝術的な物語となつてゐる點に於て、わたしはこの作の價値を認めたいと思ふ。もつとも、佐藤氏の小説家としての手腕は、恐らくさうした點にあるのだ。それが彼の身上なのだ。

が、わたしの云ひたいことは他にある。——

雜誌で見たときも、また今度の單行本で見ても、どうしたものかこの作はわたしに分明呑み込めなかつた。作の主人公自身も云ふ如く、その自己反省は鋭く、深く、且つ織やかではあるが、恐らく餘りに嗽々書かれ過ぎてゐるせらう、動もするとわたしの如き物覚えの悪い男は、讀みながらも前の部分を忘れてゆく懸念さへ覺えるのである。例へば、甲は善人だ、が又悪人でもある、つまり彼は善人でもあり悪人でもある。いや善人でもなければ悪人でもない、彼はたゞ時に善人みたいなこともやれば、又悪人みたいなこともやるだけのことだ、彼はそんな男だ、——と、まア假りにそんな

云ひ方が云へるとするならば、まさしくこの小説は、さういつた書きかたを以て終始されてゐる。なる程、甲はさういふ男かも知れない。彼は善人でもなく、さればと云つて悪人でもない。つまり今云つたやうな男なのであらう。が、それにしても餘り煩はしい書きかたではなからうか。廻りくどい書きかたではなからうか。もつと何んとか簡潔に書けないものかと思ふ。だから、わたしが作の印象を分明受けられなかつたのも、強ちわたしの物覚えのわるさにばかり責を歸することは出来ないのである。

もつともわたしは、さうした書きかたを直ちに以て作者の立場が曖昧だからとは云はない——が、ではそれは何を意味するものであらうか。

作者は作中に於て「一たい、えらいとかえらくないとか、善いとか悪いとかそんな標準は私には一切なくなつてゐた。」と云ひ「つまりは私には今何もわからなくなつてゐるといふより外に云ひ方はない。」と云つてゐる。更に又、人生に對する標準も批判も失つてしまつた「私」にどうして小説など書けやう、とも書いてあつた。——而もその「私」がこの作を書いたのだ。いや、「私」の矛盾はそれだけに止らない。批判の

物差を失つてしまつた「私」。「わからない」、「わからない」と、わからないの連發をやつてゐる「私」。更に又「或る氣質の人間にとつては言ひ分のある時でも沈黙する事もあるものだ。」と云ふ「私」。——而もその「私」が自分の戀してゐる人妻の夫を悪しざまに罵つてゐるのだ！

わたしは決して矛盾や揚足を探さうとするものではない。が、かうした矛盾を見るにつけても若しこれを悪く解するならば、これは頗る巧妙なやつつけ方だと見られなでもない、といふことを云ひたい。俺はそれが善いことか悪いことか知らぬが、あの男はこんな男だ、こんなことをした、——といふ風な書きかたを以て、その人妻の夫をやつつけてゐるのだ、と解せないでもない。しかし、それも批判の物差は失つたけれども「好みはある。」といふ「私」のことだ。だから「それが私の好みだ。」と云はれれば、それまでかも知れぬ。もつとも、さうなると彼には結局物差があるのだ。物差といふ言葉とは違ふ「好み」といふ標準の物差があるのだ。

さうだ。彼は批判の物差を失つたとは云つたが、實は失つたのではなかつた。彼に

は「好み」といふ物差があつた。而もその物差は頗る普通世間並のものであつた。彼はそれで以て女の夫を度つてゐる。——嘗つてその男は妻を虐視した、犬猫同様に扱つた。が、今その妻が「私」との間に或る關係が生ずると、俄にその男は「この女は自分の妻だ。」と云ひ出した、——といふ調子で書いて「その人にも何れはそれ相應な正義も見つけられることではあらうし、さうして又他の何人に向つてでもない自分自身に自分を完全にジャステイプアイして見ることがどうやら各人の義務であるらしいから、それに就いては、人生の批判に何の準繩をも持たない今の私、且つは彼その人の良心ではない私に何が云へるものではない。云々」などと云ひながら、結局その「私」がその男を非難してゐることは見え透いてゐる。

わたしはそれを作者のために甚だ遺憾に思ふものである。世間や人間のことはむづかしい、あゝでもない、かうでもない、と迷ひ抜いた上の「好み」？——何といふ卑俗な「好み」であらう。わたしから見れば、主人公がその人妻と近附いたのも自然なら、又今迄顧みなかつた妻が他の男と近しくしてゐるのを見て俄にその夫の心が妻の

方へ引戻されたのも同じく無理がないと思ふ。それは如何にも利己的な、人間(妻)の人格を踏みつけにした仕方ではあると云つても、而も夫のさうした心持も分るではないか。

それにしても「私」といふ男は「小説家」ではないか。殊に彼は、彼自身も自負する如く、自己反省の強い、又頗る聰明な質ではなかつたか。——勝手な男だが、なる程それも人間らしい醜さだ、無理もない、と何故彼はその男をさう思つてやれないのであらうか。……もつとも、それが「戀仇き」の場合になると、案外理解も同情も無くなつてしまふのが「人間」だと云へばそれまでだが。——

いや事によると、この小説はわたしが考へるほど、それほど大した意味もなく書かれてゐるのかも知れない。さうだ。謂はば、人妻に戀をしてもう少しといふ所で(いやな言葉だが、まあ勘辨して貰ひたい)その女に別れた。世間ではいろんな風評があるし、女の夫は「私」を悪しざまに罵つてゐるらしい。しかし本當はそれは間違ひで、自分の心持は斯うだ。そして今でもその女を思ひ續けてゐる。……といふそれだけ

のことを、云ひ譯がしたいばかりに女の夫のことも喋舌り、しかし又そんなことを云つても初まらない、いや云はねばならぬ、などと結局愚痴をコボスことになつた——のがこの小説なのだらうと思ふ。

さうだ。この小説は云ひ譯まじりに、とりとめもない愚痴を並べ立てたものなのだ。その云ひ譯や愚痴は所々脱線して、恰かもヒステリー女の如く、あまり見つともよくない圖ではあるが、又それだけに魅力があるからいゝ。實際佐藤春夫氏は愚痴小説がうまい。——いや、全く……。

(十一年九月)

藝術家に就いて

よく吾々は「藝術家たる前に人間たれ」といふ言葉を聞きます。この言葉は多くの人がまア大體異議なしに同感してゐるやうです。私が今こゝで述べようとするのも、いくらかその意味に關れるでせう。が、それならそれで分りきつたことで、今更私がこんなものを書く迄もないかも知れませんが、考へて見ると、この「藝術家たる前に人間たれ」といふ言葉は随分漠然とした意味に解されてゐるやうですし、それに偶々この頃の私が藝術家の生活態度に就いて考へてゐることもありしますので、先づそれに就いて語りながら、延いてはその言葉にも、少しく私一個の意義を見出したいと思ひます。

此處に面白い話があります。むかし、ゲーテとペトオフエンが路を歩いてゐたときです。むかふからワイマール侯の車だか輿だかが來たさうです。すると、それを見た

ゲーテは早速外套を脱ぎ帽子を除つて、稍屈み腰でワイマール侯を待ち受けました。そして、その車だか輿だか自分の前を通り過ぎるとき、彼は懇懇にお叩頭をしたさうです。ところで一方、ベトオフエンはと云ふと、これは又何んと云ふことでせう。彼は外套の襟を立て、帽子をまぶかに被つて實に豪然とワイマール侯が通るのを眺めてゐたといふことです。

私はこの話を或る人から聞いたとき、非常に面白く、意味深く思ひました。尤も、何しろ聞いた話ですから、事によると、話が間違つてゐたり、又間違つてはゐなくてもいくらか誇張されてゐないにも限りません。が、兎に角これだけの挿話から見ても、同じく大藝術家でありながら、この二人の態度の相違が、單に態度といふ外面的なものとみでなく、よくそれが、異つた二人の人間を表はしてゐてまことに面白いと思ひます。——即ち、ゲーテのその儀禮を重んじた態度は、單に彼が一個の藝術家としてのみでなく、又世間的乃至社會的にも生活者であつたことを語つてをり、一方、ベトオフエンの態度はゲーテのそれとは反對に、飽くまでも藝術家の誇りに充ち満ちた毅然

たる彼の面目が語られてゐます。

さて、ゲーテのその態度の深奥さ自由さは云ふまでもなく尊敬さるべきものでせう。が、又同時にベトオフエンの如何にも藝術家らしい態度もなか／＼愉快には違ひありません。しかしさうかと云つて單にさう云つて済してゐたのでは、人銘々の立場がなくなりはしますまいか。ゲーテの態度もいゝが、ベトオフエンのそれも面白い、などと云つて済してゐたのでは、果してさう云ふその人自身の態度が分らなくなります。無論それは双方共に藝術家の態度として非難さるべきものではないでせう。が、しかし私は、今これを私自身の問題として考へるとき、この二人の態度のうち、私は何れを探るか？ 問ふまでもなく私は、躊躇なくその場合のゲーテの方に、より多くの敬意と同感とを持つてあります。

では何故、私がゲーテのそんな世間的な態度を是とするか、藝術家なら藝術家らしく、ベトオフエンの如く大いに世間的儀禮なぞといふものを踏みつけにして、威張つたらいいではないか、——なるほど、それも面白いと思ひます。愉快にも思ひます。が、

私はそれを詰らなくはないかと思ふのです。さうした「藝術家」意識に囚はれてゐることは詰らなくはないか、と思ふのです。恐らくこの私の言葉はかなり誤解されさうです。殊に、今日の時代はプロレタリアートの世界とか云つて、資本家には反抗すべきものゝやうに云はれてをり、それはさうかも知れませんが、私の云ふのは全然そんなことゝは別問題なのです。謂はゞ、少なくともかうして社會的生存を營行でゐる吾々が、便宜上から世間的儀禮に順應するとして、それが何故いけないのでせうか。例へばゲーテのワイマール侯に對する態度、——それが何故いけないのでせうか。尤も、人々はそれがゲーテのやうな場合であれば、彼が大藝術家であるといふ理由から、却つてさういふ態度も是認しさうな傾向が見えます。が、往々世間には妙な藝術家氣質の持主があつて、随分そんなものを擯斥しかねないにも限りません。そして、何んの理由もなく、實に何んの理由もなく、さきのベトオフエンのやうな態度に賛成する人が多いやうです。私はそれを甚だ不可解に思はずにはゐられません。

こんなことを云つて行くと、随分大袈裟な議論をしなければなりません、今假り

に簡単に云ふと、——第一には、藝術家といふものも、矢張り社會の一員であることを思はねばならぬ、と考へます。そして第二には、たとひ社會といふものを全然度外視して、藝術家そのものとしても、少なくとも文學の仕事に携はるやうな者はそんな狭いことでは困る、とも考へるのです。

例へば卑近な話が、吾々が或る便宜から頭を下ける、それが何處に吾々の中心に關するところがありませんか？ 頭を下ける、それだけで下らなくなる人なら、毅然としてゐたつて矢張り大した人ではありませんまい。いや、それのみか、頭を下げるときは頭を下けてこそ、その藝術家に大きさが認められはしますまいか。藝術家は出来るだけ多くのものを見なければならぬ。知らなければならぬ。それにもかゝはらず、反抗したり、對岸視したりして、どうして藝術家が、人間のほんとうの姿や悉ゆる姿が見ることが出来ませう？

と云つて私は、どうあつても藝術家氣質を振廻したい人に向つてまで、世間的にならねばならぬとは云ひません。が、私はたゞそんな人を、囚はれた人、狭い人と見ま

す。無論そんな人も結構ですが、結局それが最も高い藝術家だとは考へられません。つまり、私の云ひたいのは、人間の持つ自由さといふ問題です。今云つた頭を下けるとか下けないとかいふことは、ほんの鳥渡したことだ。しかしながら、例へばゲーテのあゝした世間的態度を、私は彼の自由さと解釋したいのです。彼は囚はれなかつた、自由であつた、だからこそワイマール侯にも儀禮を盡した、と解釋したいのです。さう解釋することに依つて、この挿話に意義が生ずる。

畢竟、そんな彼であつたればこそ、あれだけの偉大さを持つてゐたのだと思ふのです。では、ベトオフエンはどうでせう。云ふまでもなく、彼は優れた藝術家ではありません。が、しかし彼が世間的な儀禮を踏みつけたといふことは、何を語るものか。私はそれを、彼の人間が狭かつたから、小さかつたから、だと考へます。尤も彼は小説家ではなかつたから、人間生活を見る必要もなかつたかも知れぬ。だから、そんな狭さも差支へなかつたのでせう。しかし何しろそんな態度の如きは、これを稍高い目から見れば、寧ろその幼稚さ噴飯に値する程度のものでないでせうか。

「藝術家たる前に人間たれ」——こゝで私はこの言葉を云ひたいと思ひます。私の考へるところでは、藝術家もまた人間だ。いや、人間でなければならぬ。と云ふのは、藝術家は藝術家としての自覺を十分持たねばならぬと同時に、又普通の意味に於ても健全な人間であつて欲しいのです。藝術家が藝術家としての氣位を持つことも面白いですが、さうかと云つて、それに囚はれるのはどうかと思ふのです。それに囚はれては、人物が小さく狭くなりはしないかと思ふのです。さうして、そんなものに囚はれないで自由に生きてこそ、その藝術家は大きくなれるのではないかと考へます。要するに私の云ひたいのは、藝術家は竟に藝術家であつて、しかも「藝術家」の中に閉籠らない自由さ、——それを望むのであります。畢竟、それが藝術家としても大を成す所以だと考へますから。

私はこゝで、更に文壇の二三氏の人間に就いて語ることによつて、いくらか私の云はうとするところを明かにしたいと思ひます。例へば廣津和郎氏です。私はこの人を随分物の分る人だと感心してゐます。が、物分りは非常にいゝ彼ではあるが、此處に不

彌と云ふのは、彼には或る妙な藝術家氣質があつて、しかも不可解なのは、どうやら彼が自分で自分のその點を是認してゐさうなところだ。いや、まだしも彼が所謂藝術家氣質を振廻す（と云つては大袈裟だが）だけならいゝ。そのため、逆にさういふ氣質を持ち合せない人に理解が持てないやうでは、少しへんではないでせうか。これは極く鳥渡したことです。しかし、こんな彼の考へかたが何處から來るか、そして、それが彼の人間と如何に關するか、といふことを考へると、決してそれは小さな問題ではありませんまい。廣津氏は、近代人的な、或る病的さを持つてゐるらしい。恐らく、彼の藝術家氣質尊重なども、多分にそんなところから來てゐるのでせう。そしてそれも面白いと思ひます。が、私の考へるのでは、彼はそれだけの人ではないと思ふのです。あれだけの聰明さを持つてゐる人です。藝術家氣質などの詰らないものであることも十分わかりさうなものだと思ひます。藝術家氣質の尊重！ 恐らくそれは、彼の或るマナリズムではないでせうか。私は、廣津氏がそんなものから解放されて、もつと堂々と生きるとき、彼が本當の作家となるのではなからうかと考へます。

さうした意味で私は「おせつかい」の作者、里見穉氏の心持に、かなり同感を持つものであります。恐らく「おせつかい」は、作者の世間人の一面を最もよく表はしたものだと思ひます。少なくとも、私は常にこの作を讀みながら、その點を興味深く感じてゐます。里見氏は藝術家として生きると同時に又、一個の世間人としても生活しようとしてゐます。私は、彼のその點を奥床しくも思ひ、又彼が大を成す所以ではないかとも考へるのです。が、もつとも世間人たる彼の裡には、まだ自由になりきれないところもあるやうです。主人公の小宮山に對するあの氣持なども、今少し餘裕のある考へかた、見かたが出来ないものかと思はれます。彼の考へかたは、あまりに窮屈すぎやしないでせうか。物の考へかたに範疇を持たない筈の廣津氏には、へんに世間的といふことを嫌ふマナリズムがある。そして、世間的にも生きやうとする里見氏には、物の考へかたに範疇がある。實際むづかしいものだと思ひます。云ふまでもなく里見氏の場合は、道德（廣い意味に於ける道德）に對する彼の準繩の狭さに囚るものでせう。そして、そこには幾分の異議があるにはあるが、しかし何しろ私は世間人と

しても生きやうとする里見氏の心持には同感を持つことが出来ます。

それから又、菊池寛氏に就いて云へば、私は同氏の人間にかなり興味があります。人によると彼を實行家だとか何んだとか、あまり感心出来ないやうな口吻で云ふやうですが、私はさうは思ひません。彼には鳥渡他の人に見られない或る偉らさがあると思ひます。彼の小説はしばらく措く。と云ふのは私には彼の小説よりも、人間により興味を持つてゐるからです。第一には、先づ彼の何事に對しても徹底的なところでは、他の人なら拘はりさうなところでも、彼は彼の或る合理的な考へかたから、ぐんぐん押進んで行きます。無論それには遺憾も伴なひはしますが、しかしそれが一種彼獨特な力強い生活態度となつてゐるところが矢張り彼の強みだと思ひます。又私は、彼の實行家の面影ある一面も面白いと思ひます。藝術家は何故實行家であつてはならぬか！彼はそんなものに囚はてゐないやうです。尤も彼自身、彼の生活態度にすべて自意識の裏打があるかどうか、それには幾分の疑ひがありますが、その點彼が自分で無意識であればあるだけ、却つてそこに潑刺たる人間味が窺はれて面白いとも思ひます。何し

ろ、所謂「藝術家」の多い中で、彼のやうな人のゐることは愉快です。彼は單なる「藝術家」でもなく、又勿論單なる「世間人」でもありません。實際菊池氏の人間は理解され易いやうであつて、その實まことに茫漠としてゐます。それでも人々は、よく菊池氏のことを現代的とか何んとか、極く簡單に決めてしまふやうですが、恐らくそんなのは皮相の觀察ではないでせうか。なほ菊池氏に就いては、又別な機會で詳しく云ひたいと思ひます。

暮れ三日間

此間、大磯へ行つた。恰度、出掛ける前の日であつた。ひよつくり池田孝次郎君が来て誘つて呉れたので、その翌くる日に彼と一緒に行くことにした。しかしその夜、彼が歸ると、又僕はそれが妙に臆劫にも思はれた。それに、此頃の癖で九勢を見ると日もよくない。翌日は凶日とあつて、その日から五日間謹慎すべしとしてある。そんなことで少し迷つたりした。

翌日、しかし行つて見ると大磯は暖かいので、寒がりの僕には殊の外ありがたい所であつた。池田君の家も氣に入つた。三室しかない小ぢんまりした家であるが、間取りもよし、便利にも出来てゐた。こんな所にこんな小さな家を一軒持つよさを僕はしきりに考へた。

すぐ海へ行つた。海は又一層暖かだつた。池田君と僕と、二人は砂丘に腰を卸してちつと海を見てゐた。

「海へ入る人はないかね、此頃——」

海の水までが暖かさうなので、僕はつひそんなことを云つたりした。その時、先程から傍へ来てにこ／＼してゐた青年が、

「孝ちやん／＼。」と池田君に聲を掛けて、

「あのね、正宗白鳥さんが昨日濱へ来てね、大勢人のゐる前で小便をしたんだよ。」と如何にも可笑しいといふ風に云つた。

すると池田君は、

「それあ、白鳥氏だつて小便位はするだらうよ。」と云つて、僕の方を見て笑つた。

僕はその話が面白かつた。池田君の云ふのでは、白鳥氏は道を歩きながら、芋を頬張つたり菓子を食べたりするさうだが、そんな話僕には氣持よく聞かれた。歸り途中で、池田君が白鳥氏の家を教へて呉れたが、その古い門構への中からは山茶花らしい

緑りの葉が覗いてゐた。

ところが、その夜のことであつた。あまり暖かいものだから、隣りの家で湯を買つての歸りにつひ池田君の眞似をして、シャツ一枚でももの二三分間もゐたと思ふと、忽ち續けさまに噓をした。しまつたと思つたが、もう遅かつた。どうやら風邪を引いたことがやがて分つた。

さて翌日になるとひどく気分が悪い。風邪が本物になつたらしい。ところが、僕にはまだ年末までに金に變へねばならぬ原稿が二三あつた。せめては東京へ歸るまでに、一つ位はそれを書いて置きたかつた。が、さて幾度原稿紙と睨めツこしても、二三行きりでその日も暮れ、夜は又早くから床に入らねばならなかつた。その間、池田は僕が病氣を恐れるのを散々笑つた。が、池田君、部屋に湯氣を立てて呉れたり、近所でアスピリンを買つて来て呉れたり、大いに厄介な目に會はせて實際氣の毒した。

そしてその翌くる日だ。やつて来て三日目だ。たうとう這々の體で大磯を逃げ出した。東京から持つて来た原稿紙とペンは結局おともになつてしまつた。——朝、十時過

だつた。池田君に送られて大磯驛のプラットフォームに立つてふと見ると、そこに中村歌右衛門がある。車中では、恰度僕と向ひ合つた。頭を窓におツつけて、暖かい陽光を硝子越しに受けて、メリメの「コロンパ」を読みながら時々歌右衛門の方を見ると、顔かたちは兎も角、その皮膚の厚く弛んだのが僕には淺間しく眺められた。それでも、座席の上へ稍横坐りに坐つて新聞を讀んでゐる恰好は、流石に女形らしい、しなであつた。その年齢も、寧ろ隣りで講談倶楽部の新年號の口繪を見てゐる彼の細君らしい女の方が、却つて目の縁の皺なんかで老けて見えた。

間もなく汽車が辻堂で停つて、ふと入つて来た二人を見ると、中村武羅夫氏と一人は森本氏だつた。中村氏は僕の横へ腰を卸した。

「やあ中村さんですか。」と云ふと、

「どちらへ？」と中村氏が云ふ。

それから、少しは文壇の話も出たが、そいつは書かない方がいい。それよりも中村氏は、すぐ歌右衛門に氣が附いた。そして、

「あちらは福助ですね。」と云つた。

なる程さう云はれて、僕もいつか三度ばかり舞臺で見覚えのある彼に気が附いた。

「若いですねえ。」と云ふと、

「しかしおつとりしてゐて、僕は好きな役者ですねえ。此頃女學生や若い女の間ぢやア大變な評判ですよ。」

そんなことを話してゐる處へ、車掌が切符を調べに來た。見ると歌右衛門は一等の切符を出して、何か車掌に云つてゐる。車掌もそれに答へて、二三度頭を下けてゐる。どうやらそれは、この列車に一等車のないことを詰つてゐるらしかつた。

やがて横濱へ着くと彼等の一團は降りてしまつた。中村氏は、

「横濱の興行なんですよ。」

と云つて、「しかし、あいつらは如何にも下品ですねえ。區間別車に一等のないことは分つてるんだから、なにも一等の切符を買はなくてもいいぢやないですか。何しろ、何んとか御殿を建てて、ブルジョアで納つてるんですからねえ。だが、素性は争へませ

んよ、河原乞食なんだから。」

さう云つた時の中村氏は、頑固らしい何處か古武士みたいな面影のうちにも非常に人のいいところが見られて、僕には快かつた。

中村氏は新橋で降りた。降りる時に、

「新年號ですか。」と訊くと、

「ええ、今日原稿を締切ることになつてゐんですが、こちらで締切らうと思つても中々先方で書いて貰へないものですから——これから佐藤春夫さんのところへ。」

それから二十分の後である。もう僕は東京驛前から市電の中に入つた。……そして今は、池田孝次郎も大磯も、海岸で小便したといふ白鳥も、歌右衛門も中村武羅夫も、すべて何處かへ消えて、いやそのうへ、自分の風邪のことさへ忘れてしまつて、この暮れの三日間一枚の原稿も書けなかつたことだけが氣に掛つてゐた。

里見淳とその讀者

常々、里見淳氏のうまさに敬服してゐる私は、今月の改造「鯉の巢」を読んで、もう全く堪らなくなつてしまつた。實に、實に驚嘆すべきうまさではないか！ あれは酒だ。酒！ 然う、何んといふまい、いゝ酒だらう。私はたゞもう酔つて、いつの間にか批評の舌さへ鈍つてしまつた位だ。と云ふのは、今月私は某紙で月評を書いたのだが、その時、たま／＼同じく改造に出てゐる長與善郎氏の「青銅の基督」をくさした筆ついでに、「長與氏のもやはり酒は酒かも知れぬ。しかし長與氏が酒なら、それは濁酒だ。里見氏はさしづめ白鶴ぐらゐるところか。」などと云つたのであつた。

實際、その通りではなからうか。「青銅の基督」は最早やさん／＼渡邊康輔君がやつけてゐたから今更云はぬが、あれもしかし酒は酒のうちだらう。が、あんなに悪る悪

るく、いやに強い濁酒は、決して結構とは云へぬ。贅澤（！）かも知れぬが、われわれにはやつぱり程よい加減の白鶴が有難い。

——三十越したばかりの文士で舞臺監督が、芝居で役者と本讀みか何かをしてゐるところへ、女が會ひに来る。男は外へ呼び出される。女は、役者の素顔を見たいからその部屋に連れてつて呉れとかいゝるんことを云ふが、男は、あなたが大勢の役者の中へ入つたら却つてあなたが顔を赤くするだらうとか、なんとか云つて後刻展覽會で會ふ約束をして、女は自働車で去つてしまふ。幾時間かの後、二人は展覽會で繪を見て廻つてゐる。そして男はその畫家である友人に遇ふ。女は有名好きだから、その畫家に紹介されたいのだが、さて男が紹介しませうかと云ふと、負惜しみからどちらでもいゝやうな顔をする。が、男は女のその氣持をよく知つてゐるのだ。で、結局男は半分面白づくに女に畫家を紹介する。場面一轉、男と女は川岸の料理屋へ上つた。すると、そこへ「恰度そこを通りかゝつたんだが、あなた達がゐるたからやつて來ました。それに僕も飯を食べたいから。」などと云つて、ひよつくりさきの畫家が入つて來る。

三人は飲みはじめ。有名好きな彼女のことだからもうそろそろ畫家に興味を持つて來てもよさうなものだ。この畫家も亦うま／＼この女に引きつけられて行くのかと思ふと面白いなあ、——などと、男は如何にも戀の通人らしい氣持で、畫家と女が喋つてゐるのを眺めてゐる。

筋は大體そんなものだ。もつとも、極めて淡々とした戀の境地だから、男の氣持なんかこんなには描いてない。そこが素晴らしい手際だ。洵に、あるか無きかの、しかし底では甚だ微妙に交錯した、戀の通人の氣持、それがすつきりと出てゐる。いや吹々云つたつて駄目なことだ。読んで見れば分る。そして酔ひ給へ。

實は私は、ものゝ二頁ばかりも読みかけると、もうそろ／＼酔ひがまわりはじめて劇場前での自働車の中の女と男との會話や、展覽會の中や、鯉の巢なぞの釣の道の通なぞを聞かされてゐるうちに、すつかりいゝ氣持になつてゐた。そして終りへ來て、一としきり女と話してゐた畫家が男の方を向いて酌をしようとする、男が「いや、相憎お銚子の切れ目で、——ねえさん」とか何んとか云つて婢を呼ぶ。その時、前の

川をギイと舟が岸ちかく過ぎて行つた。——暮切れ！ 然り、いゝ機嫌に酔つた私がカッカと起つた火鉢は凭れて、つひうと／＼としかけたとき、ふと開けられた障子の影から入つて來た冷たい風に、はつと醉眼を見開いた形だつた。

さて、私が「鯉の巢」に酔つて、二三日経つてからだつた。私は普段畏敬してゐる或る友人に遇つた。いろんな話が出て、新年號の創作の話が出て、改造の話が出て、里見弴の話が出て、そこで私が「鯉の巢」に酔つたことを語ると、唐突にその友人は「君、あれが分る？」と來た。私は一寸面喰つたが、「分るも分らぬもない、非常にいゝものぢやアないか。あゝいつた戀の氣持が堪らなくよく出てゐるぢやアないか。」と云つてその時は何氣なくその友人と別れた。ところが——もう一度、ところが——その夕刻、これはさきの友人よりすつと年輩の、そして又常に私の畏敬してゐる先輩に遇つて「鯉の巢」の話が出たとき、先輩の云ふには「一度さつと讀んだだけだから何んとも云へませんが、僕にはあの小説が何んのが分らなかつた。」と、斯うだ。又私は驚いた。意外に思つた。が、それで漸つと思ひあたつた。さきの友人の言と云ひ、今又こ

の先輩自身の告白と云ひ、それぢや事によると、この作品が分らぬ人があるんぢやなからうか、と疑はねばならなかつたのだ。文壇の士にして既に然りとせば、天下之れを分り得る者果して幾人がある？

いやしかし、こんなことを云つたからとて、決して／＼私に分つてるといふツラがしたのぢやありません。正直なところ、私はたゞこの作品に酔つたことをお告げした
いままでのことです。そして、若しこの作品が分らぬと云ふ人があるなら、もう一度心
切に丁寧に読みなほして御覽なさい、と云ひたいのです。さう云へば舊臘來、本紙に
出てゐる「多情佛心」だつて同じです。これは繪入りの所謂新聞小説の體裁にこそな
つてをりますが、なか／＼苦心もしてあれば又素敵にうまいものです。もつともまだ
極く初めでこれからどう變つて行くかは知りませんが、それにしても、果してあれが
天下の新聞小説讀者に分りませうか、面白いでせうか。いや、分つて貰ひたい、面白
がつて貰ひたいものです。私は、毎朝目が覺めると、いきなり床の中で何より先きに愛
讀してゐますが。――

(十二年一月)

快傑 菊池寛

若し人あつて私に、現文壇で最も誰に興味を持つかと訊ねるとしたら、今のところ
私は、菊池寛氏の名を擧げるであらう。

菊池寛氏は快傑だ。「快傑」は可笑しいが――まア「快傑」だ。彼は飽くまで現世萬能を
振翳して、縦横無礙に押通さうとする。ガムシヤラに、傍若無人に。――そこが「快傑」で
ある。實際彼のやうな人物は、文壇なんかには稀らしい。絶えず胃が悪いとか云つて
るが、その性格から來る彼の「人間」の強さは、一三年來漸く得意の時代に入るに従つ
て、ますます發揮されだした。駄々ッ兒の如く、暴君の如く、云ひたいまゝを云ひ、
したいまゝをしてゐるのが、現在の彼である。氣の弱い文壇の人達なんか、些かそれ
にアテられ氣味ではなからうか。何しろそれは、一種壯觀とさへ云つてよからう。

彼はエゴイストであつた。素晴らしいエゴイストであつた。彼は強かつた。素晴しく強かつた。そこに彼の偉さがあるのだと思ふ。もつともそんな彼のことから、缺點もあつた。その最もよく聞く非難は、彼を一個粗笨漢だと云ふのである。その非難は、必ずしも中つてゐないではなかつた。彼は感覺に於て、たしかに粗笨なところがあるやうだ。そして、その粗笨さと、彼獨特の自分の缺點を誇張して考へる性癖から来る他人に對する用心深い心遣ひとから、往々、人の心持に對して見當違ひな解釋を下したりもするやうだ。しかし考へて見ると、そんなものは彼にとつて何んでもなかつた。そんなものは、謂はゞ彼にとつて微瑕に過ぎなかつた。事實、あゝした粗笨さを持つてゐればこそ、あの強い性格が存在し得るのであらう。

私は彼が一面粗笨さを持つてゐることを毫も遺憾とはしない。何よりも私は、彼の強さを稱へたい、いや寧ろ、それを羨ましくさへ思ふものである。冷酷に、極めて冷酷に、事物の底の底まで見詰めねば已まぬあの聰明さ、そして合理的な物の考へかた——この二つが彼の人間の強さに融け合つて、あの縦横無礙な態度が出て来るのらし

い。それは一種、おそろしい偉力さへ感じられる。彼の小説を見よ！ あの一句々々切離せば甚だぶつきら棒な拙い文章が、文章全體として見るとき、如何に躍動してゐることか！ 如何に、人を牽き入れねば已まぬ力を持つてゐることか！

又、彼は嘗つて「人と作品」とかの文章で、へまなことを云つた。「作品の題材的功績」とかいふ文章で、里見弴氏に揚足を取られた。が、いくら彼がそんな片半端なことを云つても、菊池寛は菊池寛だ。と云つて、強ち彼の言葉は間違つてゐたのではなかつた。彼は半面の眞理を捉へてゐたのだ。が、他の半面は見落してゐたのだつた。云ふまでもなく、若し人が完全に両面の眞理を云ひ得るなら、それに越したことはない。が、又、彼の如く半面のみを掴んで、平氣でそれを云ひ放つのも面白いではないか。いや、そこにこそ、彼の面目があるのだ。彼の強さがあるのだ。悪く云へば、盲目、蛇に怖ぢず——そんなことも云へぬではないが、盲目の癖に怖ぢないで行くところが、非凡ではないか！

物分りのいゝ人や、感覺の繊細な人は、文壇には甚だ多く見かける。そして、それ

も大いに價值あるものには違ひない。が、彼等は「力」に缺くるところはないか。熱情に缺くるところはないか。近代人は一體に軟弱だ。吾々はそこを何んとかしななければならぬ。而もその點、菊池氏は時に物分りの悪い一面や、感覺の粗雑さはあつても、彼はあの聰明さに加へて彼一流の力と強さを持つてゐた。恐らく彼を認める人も然らざる人も、これだけは否定出來まい。そして、これをもつとく高く買ふべきではなからうか。さう云へば、所謂物分りのよさなんか、藝術家として結局何になるであらう？ 感覺の纖弱なことのみがいゝとは限つてはゐまい。實に菊池氏にとつてはかの特質がそれらの缺點を蔽ふて餘りあると思ふ。私は今月新潮で、「肉親」を讀んで、平常思つてゐた同氏の人間をはつきり感じた。いや、あまりの強さにすつかり私は壓迫されてしまつた。彼は實際非凡だつた。——それにつけても、人々の彼に對する理解がかなり淺薄なのを思つて、偶々本紙から原稿を徵されたのを機會に、鳥渡思ひついたまゝに書きはじめたが、何しろ短かくて思ふやうには書けぬ。——菊池寛氏は、「快傑」だ。が、又「怪傑」でもある。宇野浩二氏のモンスターは、二三箇月で廣津和

郎氏に正體を見現されたが、これはあんな生優しいものではなささうだ。まだく書きたいこともあるが、紙數が盡きたから、——以上。

(十二年一月)

宇野浩二と私

私は、今非常に臆劫だ。小説を読みたくもなければ、原稿を書きたくもない。全く何もしたくない。ただ、ほんやりと炬燵にでも入つて、若し何か飛びきり面白い本でもあれば、それでも読んでみたいと思ふ位だ。正月早々、厄介な月評といふ仕事を引受けて、酒を呑んだり遊んだりしたその合間に、それでも漸つと昨日やり終つたところだが、一つにはその疲れ——全く、月評といふものはそれをやつた人でなければ到底想像の出来ぬほど、疲れるものだ——かとも思ふが、いや、必ずしもそのせみばかりではない。實は、この頃私は、つくづく批評といふものゝ詰らなさを感じてゐるのである。さう云へば、少し手前勝手な議論になるかも知れぬが、一體批評といふものが自分にとつて何になるだらう？ 自分の裡に何か問題が生れて来て、それを云ふの

なら、それア意義もあるし、「云はねば腹膨るる」わけでもある。が、批評家といふ商賣は、——と私は考へるのである。そして、絶へず何かしら對象を求めて物を云はねばならぬ、そんな他處事をでもしてゐるやうな批評家商賣を、即ち自分自身を、果ては情けなくも、可哀さうにも思ふのである。と云つて、作家にしても、それが商賣となつてみれば、時には無いものを無理耶理にデツチ上げねばならぬ場合もあることだらう。しかし、まだしも批評家よりは、純粹に自分といふものが感じられるに違ひない……。

あゝ、世間の批評家連中は、よく口が動くものだ、問題があるものだ、と私はたゞ／＼感嘆しないではゐられない。いや、輕蔑せずにはゐられない。諸君、見給へ、所謂職業批評家の連中を。星移り物變り、まるで猫の目のやうに目眩しく議論の變つて行くのが、わが文壇である。而も彼等は、その中にあるて、何んとか彼とか、猫の目に調子を合せて、喋舌り得るのである。何んとべらぼうなことか！ 若し彼が本當に自分自身を考へてゐる者なら、そんなに喋舌れない筈だ。人には、銘々自分一個の立場だ

けしかない筈だ。第一、どうしてそんなに何にでも興味が持ち得るのだらうか、と不思議に思ふのである。いや、僕のやうな本當に興味を感じたことツきり喋舌れない者は、これア批評家といふものぢやアないかも知れぬ……。

さて、批評家でない批評家の私が、宇野浩二論をしようとするのである。どうせ「論」といふやうな、鹿爪らしいものが書けよう筈がない。「宇野浩二と私」といふ題に示す如く、まア精々無駄話ぐらゐのところ、讀者にも編輯者にも、御勘辨願ふ次第である。

宇野浩二といふ男は、最初からムシが好かなかつた。と云ふと、少し大袈裟だが、たしか神楽坂の都館であつた。當時サンエスといふ詰らない雑誌の編輯をやつてゐた私は、その下宿に廣津和郎を訪ねて行つた。何んでもその用件といふのは、宇野浩二と中戸川吉二とを廣津に論じて貰ひたいのであつた。今でこそ宇野と中戸川とではかなりその位置に距たりもあるが、その頃の彼は、未だあの出世作「蔵の中」と、他「苦

の世界」「長い戀仲」等を發表したばかりで、同じく中戸川と共に新進作家の二人として謳はれ出してゐたんだから、雑誌記者としての私とその二人の論を掲げたいと思ふのも、別に不審はなかつたと思ふ。云ひ忘れたが、そのとき傍にゐたのが宇野浩二だつたのである。

「どうでせう、ぜひお願いしたいのですが。」私はそんな風に廣津にたのみ込んだ。ところが、可笑しなことには、その時横にゐた宇野浩二は、さつきからへんにしんねりむつりとして、しかも何んだか女のやうな科をつくりながら、すねたやうに二人の話を聞いてゐるのである。年若い私が、好かない奴だッ、と直ぐ反感を持つたこと無論である。

「さあ、困りましたねえ。」しばらくして廣津は漸つとさう答へて、「どうも宇野君の此頃の傾向には、僕は同感出来ないんですがね。又いつか書きたくなつたら書いてもらいますが……。」

さう云つて宇野の方を、あの廣津一流の意味複雑な微笑をもつて眺めたのである。

すると又、宇野が一層からだをくねらせながら、女の見るやうに俯向いてしまったのである。

そんなわけで、廣津和郎の宇野浩二論も中戸川吉二論も遂にサンエスに出すにしまつたが、しかしそのとき見た宇野浩二の印象は、以上の如くあまりいいものではなかつた。後になつてあの時のことを考へ合せて見ると、宇野は自分の前で、自分の論を書いてくれと廣津にたのんでゐる私の臆面なさに、或ひは少し位は僻易したのかも知れない。又、中戸川と自分を一緒にされたのが不満だつたのかも知れない。が、何れにしても彼は何故あんな女のやうな妙な科をつくつて見せたのか。彼はその後、漸く流行作家になつてから、いやに容體振つてゐるといふので、若い人達には無論のこと、これまで親しかつた友人達からもひどく反感を持たれ出した。そんな彼である。そんなに大家然と納る彼である。どうして廣津の前で、あんなのか。私の考へるところでは、廣津の如く聡明で而も正直な性質の人には、宇野は困るのではなからうか。そして又、廣津にはこれまで彼が下積みで苦勞してゐた頃のことをすつかり握られてゐる

弱味もある。だから、其處に何んだか上は手と云ふか、苦が手と云ふか、兎に角洒々としてゐるにはいくらか後ろめたい氣がする或るものがあるのではなからうか。いや、あれで廣津は聰明な癖に、相手がまゐつたやうな振を見せると、案外その手に乗せられるところがある。それを、宇野がうまく利用してゐるのではなからうか……。

が、さて何んと云つても私は雑誌記者のことだ。その後、彼が諏訪から歸つて櫻木町に家を持つやうになると、よく雑誌の用事で訪ねて行つた。而も私はまだ若かつた！全く、何んといふことだらう。初めのあの悪い印象は、いつかけろりと忘れて、それのみか、當時物分りのいゝといふことに非常な價値を置いてゐた私は、二回、三回と會ふうちに、忽ち彼の物分りのよさに敬服させられる迄に變つたのである。實際、物分りのわるい位輕蔑すべきものはない。頭のわるい奴ほど厄介なものはない。志賀直哉流に云へば、馬鹿は單に馬鹿だけでなくて悪だ、とまで考へてゐた私は、もうたゞ彼の物分りのよさに、すつかり惚れ込んでしまつたのであつた。

しかし、しかし、それも長い間ではなかつた。赤子も三年経てば三歳だ。年若い私の考へも進歩した。いや、進歩か退歩か、それは知らぬが、兎に角變つて行つたことは事實である。もうその頃、私はそろ／＼物分りのよさなんか卒業しかけてゐた。物分りのいゝといふことは必要だ。が、それだけでは駄目だ。もう一つその奥に、確固たる自己そのものがなくつちやア、何物にもビクとも揺がない自己そのものがなくつちやア。……すると、それ迄は、物分りのいゝといふこと、そのことだけで彼のすべてを許し看過してゐた私も、なアんだ、宇野浩二といふ奴は食はせものだな、と氣が附き出したのである。私はその頃から彼に會はなくなつた。一つにはかのサンエスといふ雑誌もとつくに廢刊になつたために、さしあたり彼を訪ねる用事もなくなつたのであつた。が、さて思ひ出しても可笑しいのは、あの宇野浩二の二階の有様であつた。それア鍋釜の類ひまで持參の細君といふ話だから、強ち宇野その人を嗤へも出來ないが——そしてそれを思ふからこそ、それまで私はなるべく氣にしないやうに努めてゐたのだが——だが、あの野暮臭さ、いや趣味の劣等さ、下品さ、はどうだらう。田中頼

璋の軸物が掛つてゐたのはまだいゝとしても、金時繪の火鉢、階下が狭くもないのにわざ／＼二階へ据へてある鏡臺、鏡臺に掛けてある赤い模様の羽二重か何かのキレ、おまけにその横へ屏風式の小さな手拭掛けが廻してある。何んと文士の書齋、いや應接間にしては、……いや、いや、それはそのままそつくり藝妓屋の一室としか思はれないのである。

斯くの如き趣味の劣等さは、必ずしもそれを細君のせるにのみ歸するわけにも行かない。小説の中で兎にも角にも自分で「贅澤な暮しをしてゐる」などと揚言出来る彼であつてみれば、あの二階の有様一つにしてからが、若し彼自身氣に入らなければ、もう少し其處にいゝ趣味が表はれるべき筈ではなからうか。さう云へば、マント、マントのやうなあれほど個性のないものにまで、彼の下品な好みが出てゐると思ふ。彼は夏になると、紺地のマントを着用する。紺地のマント、あれが堪らなく厭味なものであることが、彼には分らないのだらうか。紺地のマントなんか、まア不良青年でも着さうなものだと思ふ。又、それは小説を見ればよく分ることだ。「屋根裏の戀人」を見よ、

「青春の果」を見よ。下品で、イヤらしくて、とても堪つたものぢやアない。左様、若し諸君のうちに、現代の春本を讀みたい人があるなら、これらの作品にお就きになるがよろしい。

一口に云へば、宇野浩二にはどうも成金趣味と云つたところがある。いつか本誌の口繪に出た寫眞なども厭味つたらしいのつべりした恰好に撮れてゐたし、さう云へば彼が荒い柄の大島の描ひなんか、ぞろりと着込んだところは、たしかに小成金の面影がある。その點、彼がいつか、島田清次郎と並べて現代的と云つた菊池寛の如きは、金を儲ける點から云ふと到底宇野の段ぢやアなからうと思ふが、それでゐて菊池になると少しもそれが厭味でない、無論下品なところなんか微塵も感じられないから不思議だ。中村武羅夫だつたか、菊池が結城の上等を着てゐる癖に、猿股はツギのあたつたのをはいてゐたがそれでもチツとも可笑しくなかつた、と話してゐたが、全くもうそこへ行くと、人間の品なんだから仕方がない。争はれないものだ、矢張り育ちなんだ。九州博多の産なんか、何處の犬の骨が分つたもんぢやアない。

一 去年の暮れだつた。時事新報は大正十年の文壇回顧を掲げた。そのとき私は、その年の文壇諸家が非常に遊蕩的氣分に満されてゐたことを難じたついでに、彼宇野浩二を「末社」だと云つたのである。無論彼は怒つた。嘗つて、彼を賞めてゐた私が一年経つか経たぬに末社呼ばはりして罵るなんか、世の中は油斷がならぬ、と云つた。そして、往々天才の中には、昨日感心して明日罵倒するやうな急變する人がある、藤森淳三よ、君もその組でありなさい、と附加へたのであつた。

私は今、あの論争を再び此處で蒸し返さうとするのではない。が、私はたと正直だつたんだ。嘗つては彼の物分りのよさに敬服したが、その後彼の下品なのに顰蹙しただけのことだ。宇野浩二よ、それを「油斷がならぬ世の中」だと云ふのか。ぢやア、云つてやらう、御同様油斷がならぬ世の中ですわね、と。先づ君自身、目の梁りを除き給へ、と。左様、君は先づ君自身のことを考へ給へ。君が芥川や里見や、さてはどうかすると志賀直哉まで悪く云つてたのは、あれや何んだ。彼は彼一流の巫山戯た云ひか

たで、如何に芥川や里見を譏したことが！ 私はそれを彼からよく聞かせられた。いや、私のみぢやアない、彼が彼等の藝術を悪しざまに罵つてゐたことは、凡そ彼の友人といふ友人悉くが知つてゐる事實だ。而も、その後、どうだらう。彼は芥川や里見に色目を使ふ——厭やな言葉だが——に至つたぢやアないか。僅か一年経つか経たぬに、嘗つて悪く云つてゐた彼等に款を通ずるに至つたぢやアないか。あのザマは何んだ。矢張りあれも「油断がならぬ世の中」ぢやアなからうか。そして、彼自身の言葉に従へば、恰度私とは反對ではあるが、矢張り天才の組なのかどうか。宇野浩二よ、君もその組でありなさい。——と、私もひとつ、彼のやうな大家的口吻を使つていてやうか。あゝ、身の程知らずのえらさうな口は利くものぢやアない！

宇野浩二は高等官になつたんださうだ。と云ふと、あまり唐突で分らぬ人もあるだらうが、そして、文壇にもそんな位階があるのですか、なぞと愚問を發すること勿れ。篋棒臭い話ぢやアないか、宇野自身、勝手に自分を高等官に任じたといふのだから

世話がないや。さう云へば、いつかも彼は時事の六號で、多分談話だらうが、長谷川如是閑もなか／＼小説がうまいから彼にも文壇の椅子を與へたらよからう、文壇の人は偏狭ですなえ、とか云つてゐた。文壇の椅子！なる程、彼一流の云ひかたで、鳥渡面白くなくもない。が、それにしても、可笑しいのは、彼がよくその「椅子」といふやつを氣にすることだ。……文壇の椅子、文壇の椅子！俺はどのへんの椅子に腰掛けてゐるのかなア、無論高等官に決つてゐるさ、あゝ、椅子だ、椅子だ、と事によるとそんな風に、夜夢にまで見てやしないかと思はれるほどである。まさか「文學は三度の飯よりも好き」だと云ふ彼のことだから、そんなこともあるまいが、しかしこれぢやア、文壇と文學とをこつちやに考へてゐるんぢやなからうか、と考へられないでもない。文學と文壇とを一緒にして考へてゐるかどうか、それは知らぬが、何しろ彼の出世作は「蔵の中」であつた。おそろしく變つてゐた。「苦の世界」が出た。これは佐藤春夫によつて、かなり評判せられた。偽物喰の佐藤春夫は、彼を人生の通人だと云つた。そして、あの作にユーモアがあるとか、物分りがいゝとか、果てはこの作者はとても食へない

位賢い男だとか、それでも流石危なつかしい物の云ひかたではあつたが、しかし賞めてゐた。が、あれは少々偽物喰の思ひすごしではなかつたらうか。もつとも、佐藤春夫も云ふ如く、彼は人生の通人ではあつた。實際彼は、人生の表通りも裏通りも、さては鳥渡人目に付きさうにもない抜け道までもよく知つてゐた。だが、さうだからと云つて、直ちに彼を食へない男だと思ふのはどんなものだらう。あまりにいろんな道を知りすぎてゐる彼は、ひよつとすると果してどの道を通つたらいいかを彼自身迷やしなかつたか、と却つて私はさう考へるのである。

それは、人によつてあるとかないか云はれてゐる、彼のユーモアに就いて云へば自然はつきりすることだと思ふ。佐藤は彼にユーモアがあると云つた。そして誰かは、あんなものはユーモアでもベーススでもないと云つた。しかし、私はその何れにも云ひ分があるのである。私が思ふのでは、兎に角ユーモアはあるにはあると考へる。なる程、それは誰かも云つた如く、上乘のものぢやアない。如何にも滑稽や諧謔を誘ふに適した道具立を並べ立て、その上で讀者の脇の下をでも擦るやうな下等な且つ無理

強ひなものではある。到底現實を突き詰めたところから、ひとりでに込み上げて来る滑稽でもなければ、諧謔でもない。全く低級で、淺薄で、安價で、お話にも何にもならぬ。が、ぢやアどうしてそんなに彼は、わざとらしい滑稽を讀者に強ひようとするのか。人生の抜け道を知つてゐる彼は、又文壇の抜け道をも心得てはゐなかつたか。長年の下積から脱け出るために、何んとかひとつ、アツと云はせてやりたい、とは思はなかつたか。而も人生の通人である彼は、あまりにも世の辛酸を嘗めすぎて來てゐた。世の中があまりに酷であることも知つてゐた。従つて彼は、人生に對して何んの希望も、熱情も、抱負も、光明も、そして正義も、凡そさうしたものは何も信じられなくなつて、果てはその準繩さへも失つてしまつてはゐなかつたか。……だが、食はねばならぬ。アツと云はせねばならぬ。さアどうしたものだらう、さア、さアと云ふので、つまり芝居でよくやる押問答みたいな具合に、とど思案の揚句、あの弱々しい、何んのことやら分らぬ不得要領主義の、ひよつとこ面を被ることになつたんぢやアなからうか。「二人の青木愛三郎」は、その間の消息を私に語つて呉れるのである。

「山戀ひ」は當時雜誌で讀まなかつたので、今度これを書くために、實は一昨日一日がかりで、退屈しながら、それでも漸つと讀み通した。しかし、この作品は決して悪いものぢやアなかつた。宇野浩二ぢやアないが、いゝものならそれがたとひ親の仇きの書いたものでも素直に感心する私は、無論親の仇きでも何んでもない彼の書いた小説だもの、それアよければ直ちに感心する位の度量は持合してゐる。「山戀ひ」は先づよろしい。つまり、傑作とまでは思はないのである。しかし私は、漸く此處らあたりで、宇野が素直に自分の生地を出して來たんぢやアないかと思ふ。鼻の寸の詰つた西向觀山といふ男や、女の腐つたみたいな堀戸や、又哲學者で相場をやるといふ、そして始終借金取に追ツかけられてゐる市木や、さうしたへんに滑稽感を誘ふ、そのうへ慘めな人物ばかりを登場させてゐる點は、やはりこれまでの彼と些かの變りもないが、彼はこの作では稀らしく生地で行つてゐる。それだけは確かだ。其處がいゝと思つた。而も彼は、これで見ると詩人であつた。主人公はじめ、大抵の人物が山を戀ふる氣持と

云ひ、又、主人公がゆめ子を思ふあのプラトニック・ラヴ(?)と云ひ、彼もまた竟に詩人であつた。作者は作中の一人物を藉りて、「あなたは浪漫派ですなえ。」と云はせてゐる。全くその通り、この作者は浪漫派の詩人なんだ。主人公と西向と堀戸の三人が山へ登るところなんか、さう云へば如何にも詩人らしい描寫(いや、説明)であつた。何んの、何んの、宇野浩二が人生の通人なぞであるものか。彼は先づ何よりもさきに、その性根は浪漫派の詩人なんだ。

又「厭世奇譚」では、私は彼の人間の憂鬱なる一面を讀んだ。彼の「妙に病的な迄に内氣な性質」(もつともこれは「山戀ひ」の中の文句だ)を讀んだ。此處には、女といふものが如何に亂倫無貞操であるかといふことが描かれてゐる。そして、さうした女を細君に持つた男が、つまり「厭世」して、その國から逃げて行つたことが描かれてゐる。必ずしも私は、この作に表はれた思想を、直ちに以て宇野その人の思想だとはしないけれど、確かに彼が若しそんな境遇に置かれたら、あの主人公のやうになつただらうと思ふ。女は斯程まで亂倫で嘔吐きである。が、彼はそれを憎まうともしな

ければ、呪はうともしない。いや、それが出来ないに違ひない。所謂「妙に病的な迄に内気な性質」から。——そして、世を侮むであらうと察する。いや、彼宇野浩二には、最早や世を侮む心持が多分に動きかけて来たかも知れぬ。

私は以上、甚だ駄足氣味にはあるが、しかし云ひたいことは大體云つたつもりだ。まだく細かく書けばキリがないが、もう與へられた紙數は盡きたし、締切も明日だ。たゞ最後に、斯くの如く不満とする點を縷々述べて来た私ではあるが、而もたゞ一つ彼の大きいなる文壇的功績を稱へずにはゐられないのを感じるのである。宇野浩二の文壇的功績！ 左様、諸君、そんなに吃驚しないでよろしい。それは實に、宇野流に云へば、私は「喇叭をもつて」でも諸君に告げたい位のことだ。他でもない、彼の文章である。彼の文章は、もう今日では誰しも何んの變哲も感じないであらう。「厭世奇譚」の文章は拙かつた。が、彼が初めてあの文章で文壇へ現はれた當時は。——それは、確かに確かに一風變つてゐた。反感を持つ者は持ち、面白がる者は面白がつた。

或ひはあれは名文といふものぢやアなかつたかも知れぬ。だが、何んといふ圓轉滑脫だらう。而もあの文章はどんな影響を齎したか。まことに、それは鳥渡想像外だらうと思ふ。今日、多くの人は知つてゝ知らずにか、實に自由氣儘な云ひ廻しの文章を書いてゐる。これは初め、宇野浩二がその手本を示したためではなからうか。私と雖も、その點いくらかは彼の感化を受けてゐないと負け惜しみは云はぬ。……「といふ氣がする」とか何んとか、むかし白樺派は當時の文章を革命した。宇野浩二のそれは白樺派の場合ほど顯者ではないが、兎に角彼が従來の文章の型を破り、自由なものにしたことは、一功績と推賞するに足ると思ふ。

終りに私は、宇野浩二の文章上の功績を祝福するために、彼の言葉を眞似て、

「宇野浩二よ、」と呼びかけるのである。「もうこれからは、決してアテようなんて思つてはなりませんよ。生地で行くんですね、生地で。——さうですとも、その上は神様の御意のまゝですよ。」

相手になつてやる

○江口渙なる文學老年、此頃何を血迷つたか、本誌「文藝春秋」へ泣き込んで危殆を上げてゐるが、見ればこの男、依然として吳下の舊阿蒙、輕蔑するよりも却つて同情した。恐らくは彼、江口渙なんか殆んど話題にする人間さへゐなくなつた折柄の、あの物欲しさうな危殆だらうが、思へば惘然だ。綿々と泣きジャクツテ六號で二頁半餘、「哀號、哀號」と響くのも、哀れアノ世の聲としか聞かれぬ。ひとつ手向のため相手になつてやる。

○彼文學老年、元來マルデ無定見の一粗笨漢、その代り絶えず意見を變へること猫の目の如く、今日東を指すと雖も、明日友人に何んとか云はれると直ちに西に改心する馬鹿さに生きてゐた。だからこそ、當時「江口渙の改心」もかなり流行つた言葉だ

が、そのうち小説が賣れないので、いつの間にか「番組文學」の仲間入をしてしまつて、あのテイタラク。先づ／＼不逞鮮人といふところだ。

○「哀號、々々」と泣く不逞鮮人、何かブツ／＼呟いてゐるので聞いてやると、人を文學青年などとホザいてゐる。こりやへんだと思つたが、なアる程、この男にはさう見えるのも無理がないと氣がついた。何しろいつまで経つても文學青年で、そのうちいつか文學老年にまでオイボレてしまつた彼のことだ。他人まで自分の仲間に見えるのだらう。——おやコイツ、自分が赤大根な癖に、人のことを何か云つてよ。

○ます／＼妙なことを云ひ出すぞ。愚痴つほい奴つてありやしない。多分那須の宿屋で、お喋舌りの堀木克三からでも聞いたのだらうが、僕が芥川からトランクを借りたのがどうしたといふのかい。オイ／＼、生意氣も休み／＼云へよ。お前は宿料さへ拂へないで、宿屋で鼻つまみだといふではないか。俺はトランクは借りても、宿料なんか滞らしはなからねえ。いやサ、トランクを借りたから芥川を賞めたと云ふのならひとつ今度はお前から借りてやらうか。借りてやらうにも、お前なんかトランクはあ

りやしまい。妬くなよ赤大根、賞められた芥川が羨ましいと正直に云つて見ろ。

○オイ焼餅焼、今東光に云つて聞かせられたぢやないか、「表てに仁俠を装ふと雖も、裡に妬心を蔵し」ツて。あれサ。今更そんな愚痴はよして、不逞鮮人なら不逞鮮人らしく、狂犬なら狂犬らしく、相手構はず吠えたがい。賞められた芥川が妬けるなら芥川にも吠えて見ろ。さう云へば、お前はいつか、宇野浩二に小説の中であれほど頓間な役を負はされながら、浩二輩に尾を捲いて泣寝入つてしまつた位、骨無しの人だなあ。卑怯な赤大根だなあ。

○不逞鮮人でその癖赤大根で、焼餅焼でその癖卑怯者で——と、斯う並べ立てられたら文學老年。いくら薄ノロでも、チツタア分つたか、氣が鎮まつたか。どうせお前なんか、もう間もない壽命だし、又いくら改心してもし甲斐のない男だから、今になつて本當の「改心」をしろなんて野暮は云はぬ。ウワズツた生活から脱け出るなんて野暮は云はぬ。だが、云つて置いてやるが、お前が人の小説の賣行を氣にするのだけは柄がないからよすがい。さうは思はないかい文學老年。一體お前に、一つだつて小説

と自分で云へるやうなものがあるかい。——これだけ云つてやつたら、どうも思ひやりのあるお言葉を頂戴しました、何より相手になつて下すつて光榮です、と、俺へお禮の一つでも云へ、えーッ、こゝな骨無し鮮人めがッ!

(十二年二月)

もつと裸かになれ

——細田源吉君の「存生」を読んで——

細田源吉君のものでは、去年の暮れ、雑誌女性に出た「三人」といふ作品に、かなり感心した。が、あれは短篇であつた。短篇だから——といふのは可笑しいが、しかしあれだけのものでは、細田君の全部を知ることには出来なかつたと思ふ。今度、「存生」を読んで、さういふ氣がした。そして、「存生」に於て僕は、作家として、且つは人間としての細田君の大體が、ほど分つたやうな氣がした。

よくわれ／＼は作品を批評する場合、「よく纏つてゐる」とか、「……ゐない」とか云ふ。そして、たしかに「よく纏つてゐる」ことは、「……ゐない」よりいゝことに違ひない。「三人」はよく纏つてゐた。僕が推賞した理由も、多く其處にあつた。——しか

し、この作はその點決していゝ出来ではない。むしろ、かなり冗漫であり、随分ゴタ／＼もしてゐる。殊に、初め三分の一にその弊が甚だしいと思ふ。それにはあの書きかたのせりもあるだらう。現在を書いてゐるかと思ふと、唐突にすつと過去のことが出て來たり。また、その次の行は現在に返つてゐたり、……一つには、さうした書きかたから來る煩はしさもあるだらう。が、兎に角それらの部分は、また、大して作の重要な部分を成してゐないやうでもある。

僕が思ふのでは、この作は、主人公本多の性慾生活が正直に描かれたところに價値があると思ふ。それは、あの、事によると讀者を退屈させるかも知れない初め三分の一を過ぎるあたりからである。事實、僕は四五十頁ばかりも讀み進んで、單に書きかたがゴタ／＼してゐるためのみでなく、ひどく面白くないのに閉口したのであるが、突然、本多の細君が自分の從兄との過去を夫に打開けるあたりから、急に興味が湧いて來たのであつた。作者は、其處から、ヂカに現實にぶつつかつてゐる。正直に、何等蔽ふところなく、事實の前に相面してゐる。それは例へば、ゴツホがその烈しい感情

のまゝに、殆んど技巧をまで度外視して、ベタリ／＼とカンヅスに繪具を叩きつけたやうに、この作者は、偽らず飾らず、かなり大膽にズバ／＼と「本當」を描いて行つた。僕は、先づそれに引きつけられたのである。

固より僕は、初め三分の一が「嘘」を書いたものだとは云はない。其處にもかなり「本當」が描かれてはゐる。いや、恐らく作者自身にとつては、この作全體が「本當」を描いたつもりではあらう。それは僕も認める。しかし、僕が思ふのでは、初めの方は決して「嘘」ではないにしても、即ちその「本當」は、小反省や小悔悟のために曇らされてはゐないか、と云ふのである。由來、この作者は作中に於てよく反省する。また、よく悔悟する。——彼元來、世間で謂ふ所の「亂倫」な性慾の持主である。本能の放恣な男である。そして、本能の前には、理性も意志も失つてしまふ男である。だから、絶えずその生活は暗い影に怯かされねばならぬ。即ち、その反省や悔悟も、必然その暗い影から起つて來るのであらうが、しかも僕は、彼がさうした「亂倫」を行ふことを一概に咎むるものではないと同時に、また、彼のそれに對する小反省、小悔

悟の如きは殆んど價値を認めないものである。もつとも、その反省なり悔悟なりが、もつと根深いものであり、若くはもつと理智的なものなれば、それア云ふまでもなく、其處に價値は生じて來よう。しかし、彼はそんな男ではなかつた。理智的な男ではなかつた。だから、屢々「亂倫」を犯し、屢々反省悔悟するだけである。そして、その反省、悔悟はセンチメンタリズムの域を脱し切れないのである。従つて、作品は生澁い、中途半端なものになつてしまふのではあるまいか。はじめ三分の一が不滿なのは、實にこの理由に他ならない。

然らば僕は、この作者にその「亂倫」を責めようとするのか？ 否。その小反省や小悔悟を責めようとするのか？ 否。彼がセンチメンタリストであることを責めようとするのか？ 否。僕は先づ彼に云ふ、もつと裸かになれ、と。——固より僕は、藝術家だからと云つて、「亂倫」な行ひをすることをいゝとは考へない。が、たゞ仕方のないことだと思ふ。彼がさうしなければならぬ人なら、仕方がないと思ふ。そして、時にはそれを或る種の「藝術家」として興味を持つて眺めるであらう。たゞその場合

彼が小反省や小悔悟をしたりすることは探らぬ。即ち僕は、この作者が（この主人公）が、そんな小反省、小悔悟など、かなぐり捨ててしまつて、赤裸な自分自身を見詰めることを望みたい。淡いセンチメンタルな靄なんか、追ッ拂つてしまつて、所謂醜い自分自身の姿を素ッ裸かに引ッpegすことを望みたい。この作の三分の一以降が僕を引きつける所以は、比較的それに近く成功し得てゐるからである。彼が、比較的裸かになり得てゐるからである。

近代に於ける思想界の著しい特長の一つはその批評的精神の盛んになつたことであらう。従つて、小説の如きもそれに影響されずにはゐなかつた。作者の批評的精神、作者の反省、……さうしたことがしきりに問題になり、また、作者も作中で批評したり反省したりせねばならぬやうに思ひ出した。これまでは、ただ如實にのみ描けば、先づ能事畢れりと考へてゐたのが、それだけでは行かなくなつた。これは、たしかに近代藝術の一進歩を劃した。が、強ちそれは一進歩としてのみ慶すべきであらうか。否、決してさうではあるまい。批評や反省を必要と考へるやうになつた結果として、今度

は何が何んでも批評せねばならぬと思ひ出した、何が何んでも反省せねばならぬと思ひ出した。そして、その弊として、センチメンタリズムを基調とする小批評や小反省を見るに到つたのではなからうか。かのへんに甘ツたるい中途半端な小説の横行の如きは、一つにはかうした事情から出てはゐないか、と思ふ。即ち、こゝに於て僕はまた「如實」といふことを力説したい。もう一度、現實を見詰めよ、と云ひたい。

さて、議論が横道へ外れたが、——三分の一以降、この作者が大膽なほど正直に、裸かになり得たのは、恐らくはあすこから作者が餘裕を失つて、殆んど夢中に書いたからだらうと思ふ。だから、その結果は、或ひは作者が豫期せざる成功であつたかも知れぬ。が、それは兎に角、僕はそこにこそ、赤裸な人間が見られて愉快であつた。——かの本能の旺んな主人公本多は、以前、多くの女と關係してゐたのみならず、細君と一緒にゐたから、また、同居してゐた妻君の幼友達といふ女とも關係した。が、それもやがて別れたが、しかし別れてから後も細君のゐない所では、その女を思つたり手紙を出したりしてゐる。しかも、自分がそんなことをやつてゐながらも、一と度

細君が前に従兄から思はれてゐたといふ話を聞くと、おそろしくそれを嫉妬する。前に細君がその従兄と関係があつたのではなからうかと疑ふ。いくら細君からそれを否定されても、やつぱり嫉妬する。細君の貞操を疑ふ。そして、のべつに煩悶ばかりしてゐる……。

作の主要なる題目はこれだけだと思ふ。もつとも、まだこの他、本多といふ男が翻譯の下請仕事をやつてゐて、漸つと細君と二人の糊口を支へてゐることや、都會生活の壓迫に堪へかねての房州の田舎家の間借生活、そこには年寄りの頑固な女主人と山内といふ本多の友人がある、といふやうなことが描いてある。そして、それはこの作の背景を成してゐるものであるが、しかし僕は、それらの背景は單に背景に止つて、大してこの作の効果を高めてはゐないやうに思ふ。本多は山内と屢々社會問題について、また生活問題について、隨所で論じあつたりしてゐる。が、それも別にこの作の價值を高めてはゐない。恐らくそれは、「長編小説」といふ或る約束の下に往々誰でもが書くお景物みたいなものとさへ、僕は思ふ。また、あの女主人である。あんな人物

も、それほどの役を勤めてはゐない。もう一人、山内にしてからが、極端に云へば、不用な人物と考へる。と云ふのは、これらの人物がよく描けてゐない理由から、さう云ふのではない。正直な話、彼等が主人公の生活とそれほど交渉がないことを思ふからである。いや、交渉がないと云へば、寧ろ僕は彼の房州生活を背景にしないで、主人公、細君、みよ子（さきに擧げた細君の幼友達といふ女）の三人が同居してゐた當時を中心として描けばもつとこの作品はよかつたのではないかと思ふ。もつとも、これは少々過激で、脱線の形かも知れぬが……。

脱線と云へば、僕はひどい脱線をやつてしまつた。根本的な脱線をやつてしまつた。僕は「存生」そのものを踏みつけにした！「存生」といふ題意を踏みつけにした！

「存生」といふ題に示す如く、本來この作は、作に現れた人物のすべてが皆めい／＼業を背負ひながら、生きながらへて行かねばならぬといふ點を主題としてゐるのだらう。が、僕はその點を無視した。孤獨で佗びしいその日を働いて生きてゐる女主人を無視した。不具で面白くもなく不自由な命をながらへてゐる山内を無視した。そして、そ

れのみか、僕は、「自分はこれまでの醜い生活を恥ぢて贖罪しようと思つてゐる。しかし自分にはいつ贖罪し得るだらう？」などと、つづまじやかさうに呟いてゐる主人公の反省までも無視し去らうとするものである！

彼はまだ「贖罪」なぞしようとしたらウソだ。そして「存生」なぞ考へるのもウソだ。若し、そんなことをしたら、それはセンチメンタリズム埒内のものである。彼の性慾生活！それが見ものだ。僕はそれを見たい、もつと、もつと見たい。しかし、この作で見ると、彼はかなり主観的な作家であるらしい。女主人や山内の人間が割に描けてゐないのからしても、それが分る。彼の性慾生活のところになると、一段と際立つて浮き上るやうに描けてゐるのからしても、それが分る。……くどいやうだが、僕は彼の性慾生活のうちに、その特異性を見出す。そこにこそ、彼の生命を感じる。作者よ。ケチな反省や悔悟なんか、溝へ捨てツちまつて、もつと大膽になり給へ。そして先づ、もつと裸かになれ！もし、君に信仰(?)が生れるものなら、その上にこそ築か
るべきだ！

——思ひきつて無遠慮に云つた。細田君、氣をわるくし給ふな。いや、多分君は、例の笑ひで、笑つて済して呉れるだらうが……。

佐藤春夫君を慨く

◆佐藤春夫君が「文壇近頃の風潮を慨く」といふ文章を掲げてゐる。僕はそれを見て驚いてしまった。佐藤君は何んといふ邪推深い男だらう。何んといふ人の心持の分らない男だらう。第一に僕を「嫌ひな人」と云つてゐるが、それにはいろんな譯がある筈だ。佐藤君が或る事に對して些かの理解を持たうともしないで、頭から僕を嫌つてゐるならゐるで、何んとも仕方がない。しかし僕は今何も云はない。何れ分る時が來ると思ふ。

◆佐藤君は僕の字野浩二論を「輕薄極まる」と云つた。それもさう見えるのなら仕方がないが、これも若し佐藤君がもう少し他人の心持の分る人なら、さうは簡単に云つてしまはなかつた筈だ。なぜ僕がああやうに書かねばならなかつたかといふことも、少

しは察して貰へないだらうか。決してこれは僕のムシのいゝ云ひ分だとのみは考へない。さう云へば佐藤君といふ人は、その作「剪られた花」で主人公の立場からばかり考へて、相手の男なんかマルデ慘めに扱つてゐるが、あれでも僕から見れば、あのどちらの男の心持にも理解がもてるのだ。あの場合人妻と親しくなつて行つた主人公の心持も無理でない如く、又相手がたとひそれまで虐けて來た妻にしる他人に取られかけると惜しくなるといふ夫の心持も、やはり少しも無理でないと思ふのだ。

◆若しそれ、僕が佐藤君を偽物喰と云つたり、その他同君の言葉を引用したといふので怒つたのなら、すべて僕は當時同君が新潮へ書いた月評の中の文句に過ぎないと云へば足る。「好んでいろ／＼なものを認めようとする私」とかいふ文句を約言したら、偽物喰といふことにならぬだらうか。彼は僕の文章の揚足をとつて、どつちつかずと云つたが、あれも前後の續き合を見れば、決して「どつちつかず」ではない筈だ。「懷疑家」の佐藤君をあらはすために云つたことが分る筈だ。殊に「心膽を練れ」なアんで佐藤君よ、それはどつちのことですか、何んです、人の心持さへ分らない癖に。

◆更に、僕のことを「内緒でこそ〜とやる」とか「真正面から」書けと云つてゐるが、かうなるともう拶揆にも困つてしまふ。佐藤君、あれは本氣ですか、冗談ですか。ひねくれるのもいゝ加減にしたらどうだ。何を以てそんなことを云ふのか？ 全く馬鹿々々しくて腹も立たなかつた。僕がそんなケチな男かどうか、知る人ぞ知る。

◆序でながら佐藤君に告ぐ。人のことを書く場合あんな風に云ふと、君自身はどうでもいゝが、相手の方がへんな人間にされて迷惑しますよ。人のことを云ふのなら少しは例證でもチャンと舉げて、「真正面から」やつつけてはどうですか。それから今の風潮が傲慢だとか、物欲しさうだとか、あんな言葉も君から聞くのは意外だつた、嘗つて多くの人々を不愉快がらせたあの誤譯指摘をやつた君から。——唇が寒い！

(十二年二月)

再び春夫君に

◆一度は高士らしく「文壇の風潮を慨」いた佐藤春夫君も、たうとうその醜い感情をサラケ出してしまつた。一日二日の本紙を見ると、また彼が「へらす口をたた」いてゐる。「下等なベンでも泣く」位ならよしがいゝと思ふのだが、やはりこの男も「氣がさすといふことを知らない人間」と見える。しかも、無理押附にでも私をわるく云はうとしたためか、足許が危ないこと、危ないこと……。

◆私のことを「輕薄なその上」に下劣な男」と云つてゐるが、それも最初うっかり談話筆記で口を迂らした手前、今更あとへは引かれぬ世間體からか、例證をちツとも擧げずに、頑固にもう一度繰返してゐるだけである。しかも、よく〜云ひがかりに窮したと見えて、「それを詳しく知りたい人があつたら」下宿へ來い、なアんで逃げたのはお

氣の毒だつた。

◆何を云ひ出すかと思つたら、彼はまた、その昔私が彼を同人雑誌に勧誘したことを引きづり出して、大いにいゝ氣になつてゐるらしいが——佐藤君、君もよッほど下らない男だね、何を子供の喧嘩みたいなことを云ひ出すのだ！なる程、昔はそんなこともあつた。だが、その頃には君も、私の下宿へ遊びに来たぢやアないか。

◆それに何んぞや、「純然たる僕のこのみから」藤森淳三が嫌ひだつて。體裁のいゝこと云ふのにも呆れる。佐藤君、君の「純然たるこのみ」はそんなのか。なる程、「このみ」と、わざと假名で書いてあるね。

◆しかし、いくら自分だけは昔のことを忘れても、多分裏の烏に笑はれたのだらう、人から云はれない先きに、彼は自分から舊惡を白狀してしまつた。彼は自分は昔イヤな人間だつたと白狀した。その白狀は愛嬌があつた。だが、彼が自分がイヤな人間だつたからと云つて、今の人達を自分と同じくイヤな人間の仲間と見るのは、だいぶ可笑しい。殊に、自分はイヤな人間だつたために損をし、今の人達は徳をしてゐるなど

と云つてゐるのも、至極香氣な考へかたで面白かつた。

◆だが、佐藤君、全くお喋舌りはしないものだねえ。今度といふ今度は、君もちツたア悟つたらう。賣られた喧嘩だから僕は相手になつて上げたのだが——君は、「風潮を慨いた」お蔭で、すつかり「ペンを穢し」たね。うつかり餘計なお喋舌りしてシクジりましたツて、正直に云つてごらん。

◆なほ、君が私に呉れた「輕薄なその上に下劣な男」といふ言葉は、どうやらお門違ひのやうだからお返しする。そして、どうやらこの言葉は君自身のものらしいから、改めて私がこの言葉を君の額に張りつけて置く。やア、なる程鼻眼鏡との具合がよくうつるよ、全く——。

私が女に生れたら、どう男を遇するか

怠け者で、そのうへ随分氣紛れ者の僕のことです、時にはいろんな空想をしたりしますね。さうです、なぜ僕は女に生れて來なかつたのだらう、女に生れてゐたら氣樂でいいだらうがなアツて。——全く女ツてもものは面白可笑しくまづ苦勞なしに暮しさへすれば、お役目が濟むんでせうからね……。

しかし、さて僕が女に生れて來たとして、そいぢやア男をどう扱ふかといふ段になると、ちよいと困ります。僕のやうな性分では、どうにも男の扱ひようがないのです。第一、良人に内緒で役者を買つたり、自働車の運轉手を可愛がつたりする度胸もなささうですし、さうかと云つて女優になつたり、藝妓に出たりしてお客の機嫌をとる勇氣もありません。仕方なしに、間違ひツこのない世話女房にでもなつて亭主大切にや

つて行くの他なささうですが、それもかう怠け者ぢやア、亭主に愛想をつかされないにも限りません。

何しろこのやうに僕は、度胸はなし、勇氣はなし、おまけにごらんの通り、自分本位でなければ動けない人間と來てゐる。どうも女になつても面白くはなささうです。だから、やつぱりこの一生は男に生れて來たことを喜ぶべきかも知れません。もつとも、今度生れ變つたとき女になるんだつたら、——さあ、そのときはぜひ度胸と勇氣のある、さうして精々お金持の娘になつて來たいものですな、はッはッはッ。

(十二年三月)

「十字軍」を讀んで懷ふ

たしか僕が小學の二三年頃だつたと思ふ。さかんに小波山人のお伽噺を愛讀したことがある。當時、僕の家は大阪にあつたので、よく日曜なぞ母親にねだつては十錢玉を一つ貰つて、朝早くから中之島にある圖書館へ出掛けた。子供の入場料二錢を拂つて、今はもうなくなつたらしい菊判の世界お伽噺合本を一二冊借りては一生懸命に讀み耽つた。馬の耳のくつついた王様の話やら、豆の蔓をよじ上つて天の惡魔を退治するジャックの話やら、すべてそんな話は、どれ位僕の子供の心を欣ばしたであらう。あんな楽しさはもう二度と得られないに違ひない。そしてまた、お伽噺が非常に僕を樂しませたばかりでなく、やがて正午近くなつて地下室の食堂へ下りて行くのが、また子供らしい樂しみの一つになつてゐた。そこには何んでも一皿五錢の、いろんな味

をつけたパンを三つ四つ皿に盛つたのを賣つてゐた。そして、欲しい人は勝手に五錢支拂つては好きな皿を持つて行つて、尻の痛くなるやうな木のベンチに腰掛けて食べるのであつた。子供の僕もやはり人並に、それでも傍へ行つてから選り好みして子供だと笑はれちやアいやだ、などと妙にコマツちやくれたことを考へながら、無造作に手近の皿を取つたりした。……入場料二錢、パン代五錢、すると都合七錢だが、残りの三錢は歸り道で何を買はうか知らず、そんなことを思案しながらお茶でパンを食べてしまふと、すぐまた閱覽室へ引返して、夢中になつて前の續きを讀んでゐる。そして夕方になつて、ポツカリ薄暗い電氣が天井に點くと、はじめて氣がついて立ち上るのであつた。

しかし、かうした楽しさもものの二年とは續かなかつた。小學も四年になる頃にはもうお伽噺はあまり讀まなかつた。今では却つて懐しい氣持で、時には振返つてみたい氣のするお伽噺も、そろ／＼生意氣になりかけてゐたのか、大して面白くなかつたらしい。而も、四年を卒へたらすぐ中學へ入らねばならぬからだになつてゐながら、勉

強の方は家では本をひろけたことすらなく、また図書館へも出掛けず、たゞぶら／＼してゐた。

その頃のことである。家にゐて父親から勉強をしろと云はれるのがいやさに、或る日しばらく振りで図書館へ行つた。そしてお伽噺以外のもので、何か面白いものを探してゐたとき、偶然番號箱の中で冒険小説「怪人鐵塔」といふのを發見して、それほど氣乗りもしなかつたが借りてみた。ところが、それは豫期に反して面白かつた。非常に面白かつた。著者は例の押川春浪であつた。委しい話の筋は忘れてしまつたが、なんでも熱帯地方の未開地に堅固な高い塔がある。そこに日本人の綺麗な××嬢が幽閉されてゐる、それを××少年が救ひ出すといふやうなことだけが今微かに思ひ出されるが、その時その話がどれ位僕の幼い好奇心をそゝり立てたであらう。お伽噺と同様随分荒唐無稽ではあるが、それでも冒険小説はいくらか現實的であり、而もより以上若い血を躍らせるに十分である。「怪人鐵塔」はその日のうちに讀み通して、「銀山王」とか、その他もう本の名も覺えないが、およそ押川春浪のものは片ツ端から讀んで行

つた。かうして、冒険小説はお伽噺に代つて、すっかり僕の愛讀書になつてしまつた。

中學へ入つてからも雑誌冒険世界は無論のこと、武俠世界で押川春浪の名を見ると、それもまた購讀した。ゴリラと格闘する話、檻に車輪をくツつけたやうなもので鐵地に乗り入れる話、等、等。僕の押川春浪熱は中學三年頃までも續いたらうか。――だが、一體なぜ僕はこんな思ひ出話をするのか。實は僕は、加藤朝鳥君の「十字軍」を讀んで、久し振りに、實に久し振りに、小波山人を思ひ出し、押川春浪を思ひ出したのである。實際「十字軍」は、僕にこれだけのことを思ひ出させたほど、それほどお伽噺否冒険小説的興味に富んでゐたのである。

さて「十字軍」が、果してどれだけ史實に據つたものなのか、但しはあの大部分が作者加藤君の空想であるのか、そんな詮議はどうだつていゝ。兎に角傳奇的物語として、また冒険小説的なものとして、僕は近頃になく氣樂な心持で愉快に、且つ面白く讀んだのであつた。

表てに飽くまで尊大を裝ひながらも裏では辛くも權謀術數によつてその位置を支へ

ようとする王様、哲學者で剽輕者らしく振舞ひながら陰謀を企んでゐる奸臣、非望を抱く卑怯者の將軍、鳥渡文章が書けるといふので珍らしがられて得意になつてゐる王女、女勇士に思ひを寄せゑる柔弱者の皇儲、さては正直と忠義に凝り固つた禁衛軍中の勇士だとか、十字軍の中でも勇士として譽れの高いバリー伯爵とその妻である女勇士だとか……さうした類ひの人物が入り亂れて活躍するのみならず、ゴリラだか狸々だかも出て來れば、獅子までも出場するといふ有様である。物語が先づ傳奇的である上に、冒險小説としてもなかく大掛りなものであることは、かう云つただけでも分ると思ふ。而も話の筋から云へば、波瀾重疊迂曲折たるは無論のこと、所謂血湧き肉躍る底の勇ましい場面もあれば、勇士佳人と相抱いて喃々の語ひをなす、豪壯なうちにも艶つほい場面もあつて、かなり興趣が深かつた。

それにまた、加藤君のあの文章があゝしたものに打つてつけの觀があつた。同君の文章は豪壯とは云へぬまでも、たしかに壯快ではある。そして少しの氣取りもなく恬淡な點や、見たところ全然陰影がないと思はれるまでに明るくてノビノビしてゐる點

なども冒險小説には恰好の文章と云つていい。さう云へば、だいいち加藤君の人間そのものからして、多分にさうしたところがありはしまいか。こんなことまで云つては失禮かも知れぬが、加藤君は、われ／＼がこの萬事煩瑣な世間にあつて絶えず苦しみながら生活してゐるのに反して、呑氣と云ふか、無邪氣と云ふか、兎に角大してそれを苦にしてゐないばかりか、何か別に或る夢みたやうなものに生きてゐて、存外氣樂さうに見えるのである。尤もこれはまた、同君にある昔の漢詩人に見るやうな物事に拘泥しない一面からも來るのであらうが、その點當今の藝術家の中にあつて珍らしく現代離れのしたところを持つてゐる。先年ジャワへ出掛けた同君は、いつだつたか頻りにアフリカの虎狩に行きたいとか云つてゐた。さうかと思ふと此間はまた、カンボジャへ行くとか行かないとか云つてゐた。氣紛れな人だから何を云ひ出すか分らぬとは云へるものゝ、しかしまた一面、同君がジャワや虎狩やカンボジャなどに或る憧れを抱いてゐることは否定出來ない。それは單に異國趣味として片附けてしまふわけにはいかぬ。われ／＼だつて出來ることなら、カンボジャも行つてみたいし、虎狩もや

つてみたい。が、どうもそれが先づ出来ない相談であり、一方また仕事を控へてゐるためか、そんなことは思つて見たこともない。しかし、同君はよくそんな空想をする——さうだ、それは空想と云ふべきであらう。そこにこそ、僕は「十字軍」の作者を見るのである。傳奇物語の作者を、冒険小説の作者を——見るのである。

なほこの作は、嚴密に云へば、その話の筋に無理な所やコジツケた所がいくらもあつた。例へば終り近く、あの忠義な侍ヘレワードが、偶然異郷で少年の頃の戀人と邂逅する場面など、稍樂が利きすぎてゐて不自然である。だがそれも考へてみると、この種の小説として、終り目出度しに作る上から仕方のないことかも知れぬし、また、讀んでゐてさほど氣にもならなかつた。むかし押川春浪はあの冒険小説で非常に持てたらしい。加藤朝鳥君たる者、また第二の押川春浪にでもなつて持て囃されること、滿更わるい氣持もしないだらうと思ふが、如何。

(十二年三月)

文壇は動く

はしがき

文壇は行詰つてゐるとか、作家は疲れてゐるとかいふ聲は、既に一昨年末、大正十年の末頃から一部の人々の間に稱へられてゐた。が、當時は未だそれが大して表面上の事實となつて顯はれるまでには至らなかつたけれど、漸く昨年に入り、その下半期になるに及んで、文壇の沈滞は最早やその極に達した。それと同時に、所謂暴風の前の静かさが來たが、それも束の間、遂に支へきれずして破綻を見せはじめた。そして今年に入るや、急轉直下、文壇は騒亂の巻と化してしまつた！「文藝春秋」を見よ、新聞の文藝欄を見よ、讀者はそこに何を見出すか。論旨など問題外である。そこには

如何に騒々しい、否むしろ殺伐の氣が漲つてゐることか！「文藝春秋」では菊池寛を
始めとして、昨日まで名さへ聞いたこともない新人達までが同じやうに思ふまゝな氣
焔を上げ、毒舌を吐く。一方、新聞に於いてはそれに「脊らを向け」る者出でて味増
をつけ、氣紛れな面白味から人を「斬捨」てんとして却つて彼自身末期の愛嬌の種を
供したことになる、或ひは高士らしく「風潮を慨く」のまではよかつたが反對に彼自
身「ペンを穢す」等、等、等。如何に出鱈目、滑稽、矛盾に満されてゐることか！
今や、文壇は全く亂軍の姿である！

一、既成文壇の崩壊

さて、斯くの如き文壇の現状は、何を意味するものか。既成文壇の權威がなくなつ
たのである。偶像が破壊されたのである。それは云ふまでもない。否、更に一步を進
めて云へば、明らかにそれは既成文壇崩壊の端緒と見るべきである。では、なぜ「崩
壊するの」か。否、どうして「崩壊」しなければならぬのか。

唐突なことを云ふやうであるが、——物事には大抵「流行」といふものが付き纏ふ。
早い話が女の首に巻くシヨオルである。これなどは最も流行といふものを顯著に我々
に感じさせて呉れる。現に、一三年前のことは知らぬが、昨年あたりから無暗に大き
な長いのが流行り出した。それには意義や價值が無論あるわけではない。長いのが流
行れば長いのがいゝだけのことである。もつとも最初、シヨオルが防寒具として發明
された時には、意義もそこにあつたのであらうが、やがてその本來の用途とは全然別
に、「流行」が付き纏つて來た。短かいのが流行つたり、長いのが流行つたり。……然
う、私はこの「流行」が、シヨオルと同様、文藝をも支配してやしないかと、考へる
のである。

或ひは私のこの言葉は、所謂眞摯の士の譏笑を買ふものかも知れぬ。が、存外文壇
の交代史なるものは、そんなところに眞の原因が潜んでゐることを私は認めずにはゐ
られぬのである。なるほど、所謂文學史を繕くならば、或る文學が次の文學へ移るに
あたつては、必ずそれに立派な理由が附けられてゐる。例へば、日本に於ける浪漫派